

# 鶴尾神社 4号墳調査報告書

——高松市石清尾山所在の積石塚前方後円墳の調査——

1983年3月

高松市歴史民俗協会



## 序

豊かで恵まれた風土を舞台として先人が歩んだ途を探ることは、誠に興味深いものがあります。

石清尾山塊には、古墳時代前期に築造された積石塚が集中し、全国からその特異性が注目されておりますが、昭和56年2月に、鶴尾神社4号墳の竪穴式石室の清掃、調査を実施した際、伝世鏡問題を提起した獸帶方格規矩四神鏡の残片を検出して、その出土地が確認され学界から熱い視線を浴びたところでございます。

ところが残念なことにこの4号墳は、採石のために後円部の一部が崩壊いたしましたので、国・県の補助金を受け、昭和57年7月から緊急確認調査を実施し、調査結果をまとめることになったのであります。

今回の調査によって、墳形、出土土器等から最古の部類に属する古墳ではなかろうかとの結果が得られ、考古学者からも、そのような評価をいただいております。

本報告書が、積石塚に関する研究の一助となれば幸いに存じますが、ご批判、ご指導もよろしくお願い申しあげます。

わたしたちは、祖先の生活と文化の証とも言える貴重な文化財を見直し、大切にして参りたいものだと思います。

最後に今回の調査にあたり、土地所有者、採石業者をはじめ、ご指導、ご援助ならびにご協力いただきました関係者の皆さま方に心から感謝の意を表しますとともに、厚くお礼を申しあげます。

昭和58年3月

高松市教育委員会

教育長 三木 義夫

## 例　　言

1. 本報告書は高松市教育委員会が、香川県教育委員会の援助を得て、国庫補助事業として実施した「鶴尾神社4号墳」の発掘調査報告である。
2. 「鶴尾神社4号墳」は、高松市西春日町1063番地7に所在する。
3. 調査においては、土地所有者曾我部高志氏、採石業者四国碎石株のご理解とご協力を得た。
4. 調査関係者は下記のとおりである。

文化庁	文化財調査官	浪貝　毅（調査指導）
香川県教育委員会	文化行政課課長	笹川 高 美
	" 課長補佐	林 茂
	" 副主幹	松 本 豊 肇
	" 係 長	伊 沢 肇 一
	" 主任技師	渡 部 明 夫（調査担当）

高松市教育委員会	教 育 長	三木 義夫
	教 育 部 長	川田 秀幸
	教 育 部 次 長	山 口 義秀
	文化振興課 課 長	三島 勝 幸（事業総括）
	" 課長補佐	入江 武 夫（調査総括）
	" 係 長	小泉 康 裕
	" 主事	須 和 建 一（庶務担当）
	" "	藤井 雄 三（調査担当）
	" "	谷 本 順 泰
	" "	馬 場 朋 美

5. 調査全体について、香川大学講師 丹羽佑一氏の指導ならびに援助をうけた。
6. 現地調査は、入江総括のもと、主に渡部・藤井があたった。
7. 獣帯方格規矩四神鏡の調査は、所有者上原文夫・孝夫両氏のご厚意をいただき、上原孝夫氏宅で、渡部・藤井があたった。
8. 航空写真量は、朝日航洋㈱に業務委託し実施した。

9. 県内横石塚古墳の踏査については、休日を利用し、渡部・藤井、それに丹羽氏の参加を得て行った。その際、坂出市立郷土資料館長川畠達氏、高松市歴史民俗協会事務局長今岡重夫氏、綾南町在住の郷土史家田村久雄氏のご協力を得た。

10. 鶴尾神社 4 号墳以外の出土遺物については、京都大学、坂出市立郷土資料館、広島大学古瀬清秀氏等のご協力をいただいた。

11. 本報告書の執筆は、渡部・藤井が分担して行った。また川畠達氏に玉稿をいただいた。なお、執筆分担は文末に明記した。編集についても、渡部・藤井が担当した。

12. 遺物写真は渡部、現場写真は渡部・藤井、また航空写真等は朝日航洋㈱、市広報課による。その他丹羽氏、香川県教育委員会からも提供をうけた。

13. 調査中、下記の方々のご来高があり、適切なご指導をいただいた。

天羽利夫、出原恵三、石野博信、岩崎二郎、植松正、宇垣匡雅、植野浩三、狐塚省三、木原溥幸、河野雄次、小竹一郎、瀬見浩、菅原康夫、高畠知功、高橋徹、高橋謙、武末純一、都出比呂志、春成秀爾、樋本誠一、藤田憲司、古瀬清秀、間壁忠彦、正岡勝夫、町田章、松本敦三、溝潤茂樹、六車恵一、森浩一、山本三郎、横田建一、香川県教育委員会文化行政課埋蔵文化財担当諸氏

また、下記の機関方々にもご指導をいただいた。

奈良国立文化研究所 田中琢、木下正史、岩本正二、倉敷考古館 間壁寛子

(敬称略)

14. 本書では、石清尾山塊古墳群調査報告にある摺跡谷古墳群の名を、石清尾山○号墳とした。

## 目 次

(I)	調査の経過	1
(II)	歴史的環境	3
(III)	墳 丘	12
(1)	立 地	12
(2)	用 材	12
(3)	墳丘細部	13
(4)	墳丘外	14
(5)	墳丘復元について	17
(IV)	石 室	19
(V)	出土遺物	21
(1)	獸帶方格規矩四神鏡	21
(2)	土 器	22
(3)	土器文様	29
(VI)	讃岐における積石塚古墳とその分布	34
(1)	総数と墳形	34
(2)	分 布	34
(3)	用 材	39
(4)	占 地	39
(5)	比高差	40
(6)	海との関連	40
(7)	前方後円墳	41
(8)	河原石	42
(9)	積石塚古墳の分布について	42
(10)	ハカリゴーロ古墳の石室	42
(11)	積石塚古墳の出土遺物	43
(VII)	鶴尾神社 4号墳をめぐる諸問題	58
(1)	鶴尾神社 4号墳出土の鏡について	58
(2)	出土土器について	59
(3)	県内の堅穴式石室について	64
(VIII)	おわりに	76

## 挿 図 目 次

第1図	昭和53年頃の採石状況	1
第2図	伐闇風景	2
第3図	高松市周辺主要遺跡分布図	4
第4図	川添浄水場遺跡出土土器	5
第5図	高松茶臼山古墳堅穴式石室	5
第6図	相作牛塚出土遺物（須恵器・人物埴輪片）	6
第7図	〃 (杏葉片・挂甲小札)	6
第8図	〃 (家形埴輪片)	6
第9図	石清尾山2号墳	7
第10図	坂田庵寺跡礎石列	7
第11図	坂田庵寺跡	7
第12図	石清尾山周辺遺跡分布図	8
第13図	石清尾山全景	9
第14図	くびれ部実測図	15
第15図	獸帶方格規矩四神鏡	23
第16図	〃 拓本	25
第17図	鶴尾神社4号墳出土土器実測図	28
第18図	〃 文様（I）	31
第19図	〃 文様（II）	32
第20図	積石塚古墳分布図	35
第21図	ハカリゴーロ古墳の石室略図	41
第22図	石船塚古墳・姫塚古墳・横立山経塚古墳出土遺物	44
第23図	ハカリゴーロ古墳出土遺物実測図	45
第24図	伝横峰2号墳出土鏡	45
第25図	関連土器資料（I）	61
第26図	〃 （II）	62
第27図	文様想定復元図	63
第28図	香川県内の堅穴式石室	65

## 表 目 次

第1表	県内積石塚古墳集成（I）	49
第2表	〃 （II）	54
第3表	県内堅穴式石室集成	75

## 付 図 目 次

第1図	鶴尾神社4号墳墳丘平面実測図	
第II図	〃 (コンターライン付)	
第III図	鶴尾神社4号墳堅穴式石室実測図	
第IV図	〃 墳丘復元図・断面図	
参 考	(1) 篠ヶ松古墳墳丘測量図	
"	(2) 横立山経塚古墳墳丘測量図	
"	(3) 石清尾山9号墳墳丘測量図	
"	(4) 高松茶臼山古墳墳丘測量図	

## 図 版 目 次

図版 1-(1) 鶴尾神社 4 号墳遠景 (南東、奥ノ池堤から)	78
-(2) " 近景 (南西、上空から)	78
図版 2-(1) 調査前 (墳丘、前方部)	79
-(2) " (石室、西から)	79
図版 3-(1) 鶴尾神社 4 号墳墳丘全景 (直上から)	80
図版 4-(1) 鶴尾神社 4 号墳墳丘 (北西から)	81
-(2) 後円部断面	81
図版 5-(1) 墳丘 (前方部先端外側から)	82
-(2) " (後円部から、頂部に蛭塚古墳所在)	82
図版 6-(1) 前方部先端墳裾列石 (北西から)	83
-(2) " コーナー (北から)	83
図版 7-(1) 前方部先端墳裾発掘状況	84
-(2) " 露岩整形状況	84
図版 8-(1) 前方部側面墳裾列石 (西から)	85
-(2) " ・露岩・後円部 (北西から)	85
図版 9-(1) くびれ部墳裾列石 (西から)	86
-(2) " (北から)	86
図版 10-(1) 後円部西侧段築 (北西から)	87
-(2) 後円部東側段築 (北から)	87
図版 11-(1) 穫穴式石室西小口壁	88
-(2) " 東小口壁	88
図版 12-(1) " 全景	89
-(2) " 内盃掘穴	89
-(3) " 北西隅	89
-(4) " 南東隅	89
図版 13-(1) " 南側壁 (東部)	90
-(2) " 床面	90
図版 14-(1) 獣帯方格規矩四神鏡出土状況 (I)	91
-(2) " 出土状況 (II)	91
図版 15-(1) "	92
-(2) " 片 (今回出土)	92
図版 16-(1) " 内区部分拡大	93
-(2) " 外区部分拡大	93
図版 17-(1) 土器出土状況 (石室周辺)	94
-(2) " (くびれ部)	94
図版 18-(1) 墳裾部出土土器	95
-(2) 同 底 部	95
図版 19-(1) 墳裾部出土土器口縁部 (内面)	96
-(2) " (外面)	96
-(3) 壺口縁部	96
-(4) 二重口縁土器	96
-(5) 長頸壺 (頸部)	96

図版19-(6)	埴輪部・後円部出土土器底部	96
- (7)	ヘラ彫文様(口縁部)	96
- (8)	" ( " )	96
図版20-(1)	" (頸部)	97
- (2)	" (肩部)	97
- (3)	" (体部)	97
- (4)	" ( " )	97
- (5)	" ( " )	97
- (6)	" (肩部)	97
- (7)	" (体部)	97
- (8)	" ( " )	97
- (9)	" (体部及び頸部)	97
図版21-(1)	鶴尾神社1号墳埴丘(北から)	98
- (2)	" 2号埴丘( " )	98
- (3)	" 3号埴丘(南西から)	98
図版22-(1)	猫塚古墳中円部(西上空から)	99
- (2)	" 穴式石室(西から)	99
図版23-(1)	姫塚古墳埴丘(南西上空から)	100
- (2)	石船塚古墳後円部(北東上空から)	100
図版24-(1)	" 朝抜式石棺石枕	101
- (2)	" 後円部穴式石室	101
図版25-(1)	北大塚古墳前方部コーナー一段築(北東から)	102
- (2)	稲荷山姫塚古墳前方部先端最上段築(南から)	102
図版26-(1)	石清尾山9号墳前方部先端壙掘列石(南東から)	103
- (2)	稻荷山北端古墳埴丘(南から)	103
図版27-(1)	鶴の部古墳近景(西から)	104
- (2)	川東積石塚古墳後円部近景(東から)	104
図版28-(1)	横立山経塚古墳後円部(中央凹地は穴式石室盗掘穴)	105
- (2)	聖通寺山古墳(南から)	105
図版29-(1)	ハカリゴーロ古墳堅穴式石室西小口壁	106
- (2)	" " 開口状態	106
- (3)	大窪経塚古墳堅穴式石室開口状態	106
- (4)	" " 東小口壁	106
図版30-(1)	すべり山2号墳堅穴式石室(第1石室)	107
- (2)	" " 南西小口壁(第1石室)	107
- (3)	すべり山3号墳 "	107
- (4)	越山1号墳堅穴式石室	107
- (5)	横峰2号墳 "	107
図版31-(1)	ハカリゴーロ古墳出土内行花文鏡	108
- (2)	" 鉄鏡	108

## [I] 調査の経過

鶴尾神社4号墳は、京都帝國大学文学部考古学研究報告・第12冊・讃岐高松石清尾山石塚の研究、梅原末治（以下、京大報告と略）に、土居ノ宮後丘墳として紹介されている。その後、昭和44年頃、当時高松市文化財保護委員の小竹一郎氏は、石清尾山を詳しく踏査し、鶴尾神社4号墳の前方部の積石を鶴尾神社裏山4号墳、京大報告で土居ノ宮後丘墳とされた後円部を鶴尾神社裏山5号墳とした。

統いて、昭和45年、46年の二ヶ年にわたって、石清尾山頂付近に所在する後期古墳の調査と、山塊全城を対象とした分布調査が高松市教育委員会によって実施された。その結果、鶴尾神社裏山4号墳と同5号墳はまぎれもなく前方後円墳であることが判明したのである。そこで、新たに鶴尾神社4号墳と名付けられ、5号墳は、より下方のそれまで6号墳と呼ばれていた古墳にゆずられた。なお、鶴尾神社と土居ノ宮は同じ神社をさし、後者は通称である。

一方、昭和36年に鶴尾神社4号墳の下方で開始された採石は、年々その範囲を拡大し、石清尾山塊古墳群調査報告、高松市教育委員会1973（以下、市教委報告と略）では、鶴尾神社5号墳の直下まで危機が迫っていることを報告したが、未調査のまま、ついえ去ってしまった。昭和53年1月18日には、採石業者からの誓約書が提出され、また、採石許可権限者の香川県知事との間で、鶴尾神社4号墳墳丘地域は、採石許可外とされたが、不幸にして後円部の中心近くまで崩壊する事態を生むにいたった。

墳丘の一帯崩壊が伝えられたのは、昭和55年夏である。昭和55年9月2日には、高松市教育委員会の職員が現地におもむき、現状を確認するとともに、香川県教育委員会を通じて、鶴尾神社4号墳付近での採石の中止を申し入れた。

昭和56年2月25日とりあえず、県教委指導のもと市教委が、崩壊の危機にさらされている堅穴式石室の清掃を行った。  
盗掘を受けた石室でもあり、成果はあまり期待されなかったが、2月27日、石室の中ほどから、1個の鍾片の出土をみたのである。その背面の磨減と2個の穿孔によって、伝世鏡論の根拠となった獸帶方格規矩四神鏡の残片であることが明らかになった。あわせて、石室埋土よ



第1図 昭和53年頃の採石状況

り、綾杉文や複合鋸齒文などの縁刻のある土器片が多数発見されるに及んで、一時作業を中止し。その重要性にかんがみ、あらためて本格的な調査を実施したのである。

調査は、国庫補助事業の緊急確認調査として、県教委の応援を得て、市教委が実施した。現地調査期間は、昭和57年7月20日から10月6日までである。ただし、

墳丘の航空写真測量については、昭和58

年2月11日に、市教委と契約した朝日航洋㈱によって行われた。

また、県内の他の積石塚古墳については、休日を利用して調査員が踏査を実施した。

以上の調査については、香川大学講師丹羽佑一氏の援助・指導を得た。あわせて、土地所有者、四国鉄石（株）、香川県教育委員会をはじめ、多数の関係機関ならびに関係者にご支援、ご協力をいただいた。ここに厚くお礼を申しあげたい。（藤井）



第2図 伐開風景

## 〔II〕歴史的環境

瀬戸内海に北面した讃岐の中ほどに低い山並に開まれた高松平野がある。その平野に浮かぶ山が石清尾山塊で、鶴尾神社4号墳は、その一隅に立地する。

平野は、東部を流れる新川・春日川と西部を流れる香東川・本津川によって形成される。現在、埋立等により海岸線は、ほとんど東西に走る人工海浜であるが、古墳時代においては、新川・春日川の河口付近が深く湾入していたと想定でき山塊の北側—高松の中心街あたりは波洗う遠浅の浜で、山塊は、おそらく半島状の地形であったと考えられる。

水田や住宅地に開まれた石清尾山塊は、平野部からいきなり立ちあがった急峻な山腹をもつ独立山塊で、山頂にはかなりな平坦地がみられる。

山塊に立てば北方は備讃瀬戸をゆきかう船がそして眼下の高松港には出船入船が絶え間なくみられ、山塊のもつ重要性を十分に感じとれる。一方、南をはじめとした展望は良好で、条里制の名残りが暁然とした高松平野が、隣々まで見渡せる。

周囲10km余の石清尾山塊は、その地形から標高100m余の時鳥打越と切通越で、石清尾山地区・室山地区・淨願寺山地区に分割できる。

石清尾山地区は、山塊の中心にあたり標高232.6mの狹義の石清尾山山頂から、北に開いたU字状の尾根筋と、それに開まれた標鉢谷を含む。

室山地区は、石清尾山地区の東に鳥打越をはさんで、北に稻荷山、南に標高200mの室山が続く。なお、特別名勝栗林公闐の借景として名高い紫雲山は、この南北に走る稜線をさす。

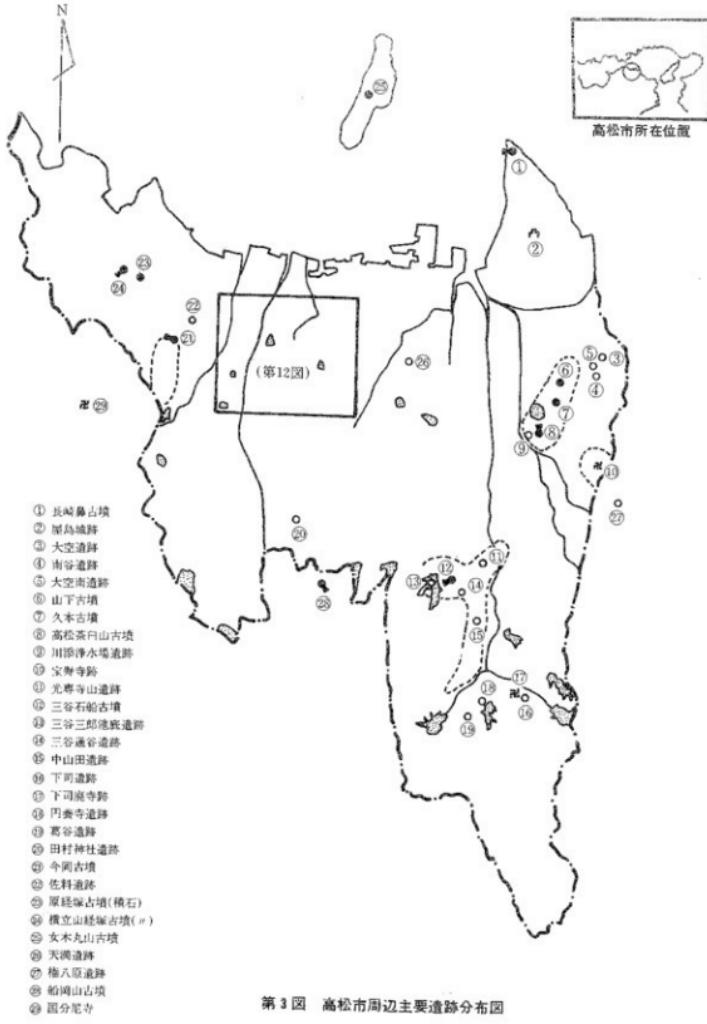
淨願寺山地区は、石清尾地区と切通越の南にのびた山で、最高所の淨願寺山は標高239.7m<sup>(1)</sup>と、山塊最高所でもある。

高松平野の遺跡については、十分な調査が行われているとはいがたい。それを前提にして、遺跡の分布を述べると、次のとおりである。なお、遺跡は時代別とし、多数の場合は、高松平野の東縁から、南縁、西縁そして中央をしめる石清尾山の順序とする。

高松平野とその周辺においては、旧石器時代の遺跡はみられない。縄文時代になると、前期の下司遺跡（第3図16）、後期の三谷三郎池底遺跡（第3図13）、晚期の光専寺山遺跡（第3図11）と、南部の谷あいに点々と、小規模な遺跡がみられる。

弥生時代は、光専寺山遺跡、天溝遺跡（第3図26）から前期後半の土器が出土している。中期では、中山田遺跡（第3図15）、標鉢谷遺跡（第12図β）<sup>(2)</sup>が知られている。後者は高地性集落である。

後期から古墳時代初頭の遺跡は各所に出現する。多量の土器が一括出土した大空遺跡（第3



第3図 高松市周辺主要遺跡分布図

図3) 大空南遺跡(第3図5), 南谷遺跡

(第3図4), 川添浄水場遺跡(第3図9)

が東部で知られ、南部は葛谷遺

跡(第3図19), 田村神社遺跡(第3図20)

西は佐野遺跡(第3図22)が所在し、石

清尾山塊でも、奥ノ池遺跡(第12図7)

南山浦遺跡(第12図8)片山池下遺跡(

第12図6)が知られている。

また、石清尾山塊の北端、下ノ山遺跡

(第12図a)から銅鋌2本が出土し、南

部の西植田町からは細形銅劍の出土を伝

える。

遺跡数の著しい増加は、高松平野の、

開発がこの時期に進んだことを示すもの

であろう。

墳墓遺跡については、椎八原遺跡(第

3図27), 円養寺遺跡(第3図18), 三谷通

谷遺跡(第3図14)などで、古墳発生前

後の墳丘墓や壇塚などが検出されている。

古墳時代前期の前半に属する古墳とし

ては、前方後円墳高松茶臼山古墳(第3

図8, 第5図, 付図IV-④)や、石清尾山

古墳群の双方中円墳壇塚古墳(第12図6)

などが候補にあげられる。とくに前者は、

長大な石室と鍾形石をはじめとした出土

品等に畿内的な要素がみられ、在地性の強

い石清尾山古墳群との関係が注目される。

前期後半から中期初頭にかけては、長

崎鼻古墳(第3図1)三谷石船古墳(第3図12)船岡山古墳(第3図28)や石清尾山古墳群の

石船塚古墳があり、いずれも前方後円墳で倒抜式石棺を主体部にもつ。積石塚古墳と並んで

讃岐古墳文化の特徴とされる石棺をもつ古墳が、積石塚古墳の分布圏を離れて立地することは、

互いに相反する文化の所産ではないことを示すのだろうか。



第4図 川添浄水場遺跡出土土器



第5図 高松茶臼山古墳竪穴式石室

中期の古墳は、今岡古墳（第3図21）と女木丸山古墳（第3図25）があげられる。前者は前方部に特殊な陶棺を埋納し、後者は金製 飾付耳飾一対が出土している。

後期初頭の古墳としては、昭和48年に亡失した相作牛塚（第12図n-2）がある。遺物は工事中の採集であるため、一部分ではあるが、鉄劍1、杏葉片2（第7図）挂甲小札15点（第7図）円筒埴輪片多数に混って家形埴輪（第8図）県下初の人物埴輪片（第6図）もみられ、須恵器（第6図）もかなりの出土をみた。

6世紀後半から7世紀の初頭、群集墳の盛行する時代の古墳は、平野の東、南、西、そして石清尾山塊に数多く分布する。

調査された石清尾山2号墳（第9図第12図b-1）、13号墳（第12図a-1）等は、須恵器、鐵鎌、刀子、金環などを副葬した横穴式石室墳である。その他、中山田1号墳、2号墳（第3図15）、南山浦古墳群（第12図H）等もほぼ同様の内容をもつ。

久本古墳（第3図6）、山下古墳（第3図7）も同時期の古墳であるが、ともに巨石を使用した横穴式石室墳である。前者は、県下唯一の石棚をもち、その下から陶棺が発見された。副葬品の須恵器や承台付銅鏡から6世紀後半に築造され、7世紀初頭まで追葬が行われたと推測できる。7世紀後半の天智6年（667年）には、平野の東北をしめる屋島に城が築かれたと日本書紀にあり、現在石基の一部が残る（第3図2）。

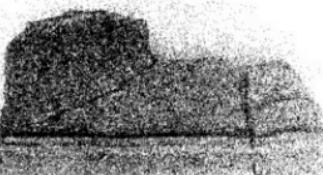
上代寺院については、宝寿寺跡（第3図10）下司庵寺跡（第3図17）坂田庵寺跡（第12図5第10



第6図 相作牛塚出土遺物（須恵器・人物埴輪片）



第7図 相作牛塚出土遺物（杏葉片・挂甲小札）



第8図 相作牛塚出土遺物（家形埴輪片）

承台付銅鏡から6世紀後半に築造され、7世紀初頭まで追葬が行われたと推測できる。7世紀後半の天智6年（667年）には、平野の東北をしめる屋島に城が築かれたと日本書紀にあり、現在石基の一部が残る（第3図2）。

上代寺院については、宝寿寺跡（第3図10）下司庵寺跡（第3図17）坂田庵寺跡（第12図5第10

、11図）などがあげられる。とくに、坂田庵寺は、積石群が発掘されたが、報告が未刊なためその詳細は不明である。なお、県指定有形文化財の金銅誕生釈迦仏立像の出土地は、坂田庵寺周辺である。

石清尾山塊周辺においては、古墳が密集しているので、さらに詳述する。

山塊の西を流れる香東川と本津川にはさまれた地域に、仮称一弦打古墳群がある。発掘調査を経てないために、全てが古墳であるとは即断できないが、約50ヶ所の塚状の高まりがみられ、4支群「半田・小坂古墳群（第12図M）／相作・玉幕古墳群（第12図N）／青木古墳群（第12図L）／紙漉古墳群（第12図K）」に分割できる。先述した相作牛塚の他、円筒埴輪を出土した前方後円墳といわれる王塚古墳（第12図n-3）、また相作馬塚（第12図n-1）／紙漉1号墳（第12図k-1）／半田・小坂11号墳（第12図m-3）の墳丘には葺石らしい河原石が、そして紙漉1号墳では版築が認められる。

淨願寺山地区は、石清尾山塊中最も古墳の集中する箇所である。積石塚古墳の野山4号（第12図28）とがめ塚古墳（第12図j-1）を除いたほとんどが、後期に属する横穴式石室墳で、淨願寺山頂とその東麓に多く分布する。とくに淨願寺山頂の古墳群（第12図G）は、50基余の横穴式石室墳があつかも規則性があるよ



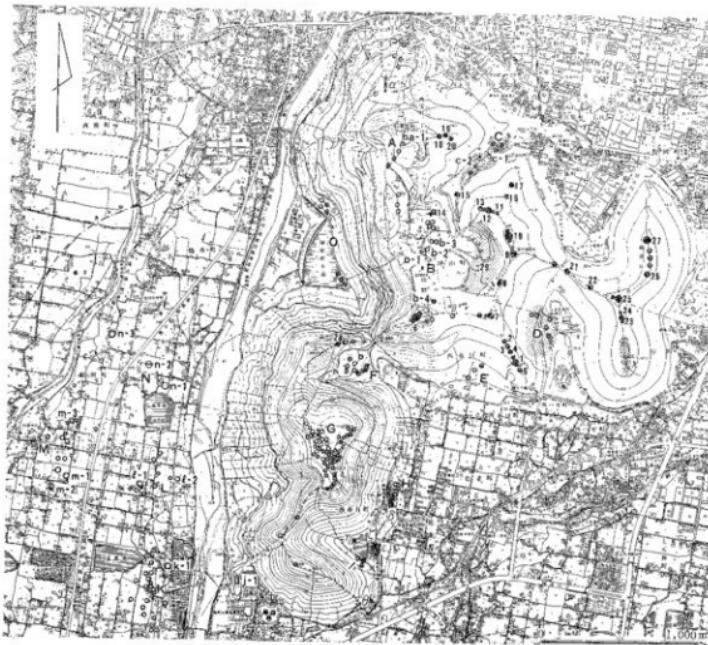
第9図 石清尾山2号墳



第10図 坂田庵寺跡礎石列



第11図 坂田庵寺跡



第12図 石清尾山周辺遺跡分布図

- 地名  
 1. 鶴尾神社 4号墳  
 2. 鶴尾神社 2号墳  
 3. 鶴尾神社 2号墳  
 4. 鶴尾神社 3号墳  
 5. 鶴尾神社 5号墳 (亡失)  
 6. 鶴尾神社  
 7. 小坂古墳  
 8. 小坂古墳  
 9. 右船塚古墳  
 10. 銀坂古墳  
 11. 北大坂東古墳  
 12. 北大坂古墳  
 13. 北大坂古墳  
 14. 石清尾山 9号墳  
 15. 石清尾山 23号墳  
 16. 北大坂北方 1号墳  
 17. 北大坂北方 2号墳  
 18. 石清尾山 14号墳  
 19. 石清尾山 15号墳  
 20. 石清尾山 16号墳  
 21. 鶴尾山 3号墳  
 22. 鶴尾山 2号墳  
 23. 鶴尾山 1号墳  
 24. 鶴尾山 4号墳  
 25. 鶴尾山 5号墳  
 26. 鶴尾山 6号墳  
 27. 鶴尾山 7号墳

28. 野山 4号墳  
 29. 沟跡名古墳小傍石塚群 (亡失)  
 30. 墓  
 A. 石清尾山遺古墳群  
 a - 1 右岸尾山 1号墳 (横穴式石室)  
 B. 榎林山西古墳群  
 b - 1 石清尾山 2号墳 (横穴式石室)  
 b - 2 右岸尾山 4号墳 ( )  
 b - 3 右岸尾山 4号墳 ( )  
 b - 4 右岸尾山 4号墳 (横穴式石室數基亡失)  
 C. 稲山遺古墳群  
 c - 1 横山遺古墳 1号墳 (横穴式石室)  
 c - 2 墓山遺古墳内箱式石棺群 (亡失)  
 D. 鷺ノ池古墳群 (横穴式石室)  
 E. 芝山遺古墳群 ( )  
 F. 丹波遺古墳群 (横穴式石室)  
 G. 丹波遺古墳群  
 H. 南山遺古墳群 ( )  
 I. 片山遺古墳群 ( )  
 J. 小山古墳群  
 j - 1 内の原内墳 (亡失)  
 K. 畦邊古墳群  
 k - 1 畦邊古墳 1号墳  
 L. 鹤尾古墳群  
 l - 1 青木 4号墳  
 l - 2 青木 2号墳  
 M. 半田・小坂古墳群  
 m - 1 小坂古墳群
- m - 2 幸田馬場古墳  
 m - 3 半田・毛喜山11号墳  
 N. 朝伊・毛喜山古墳群  
 n - 1 相作馬塚  
 n - 2 相作牛塚 (亡失)  
 n - 3 于塚古墳  
 O. 鶴尾古墳群 (横穴式石室)  
 P. 稲山遺古墳群 ( )  
 a. 下ノ山遺跡  
 β. 鶴井谷遺跡  
 γ. 鶴ノ池遺跡  
 δ. 田代谷遺跡  
 ε. 芝山遺跡  
 ζ. 稲田原遺跡  
 η. 丹波遺跡  
 θ. 西山塚 1号墓跡  
 ι. 芝山城跡  
 κ. 稲田名跡 素絵公園  
 ● 稲石古墳  
 ○ 逆山古墳 ( )  
 ◎ n ( ) ( )  
 c - 2 は既往でもなくの等地造成のおり発見されたもので、箱式石棺群がみられた。若手の標石も忘れる墳丘をもつたといふ。

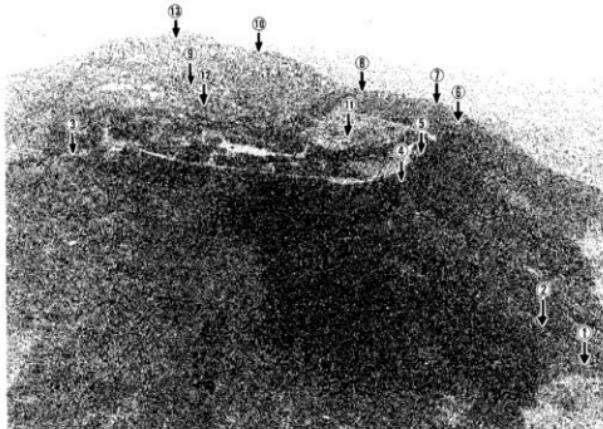
うに、馬蹄形状に分布する。<sup>36</sup>

がめ塚古墳は、すでに亡失しているが、石清尾山塊南端の低い位置に立地する土盛り前方後円墳であった。<sup>39</sup>

室山地区については、積石塚古墳だけが後線上に点在する。北より群中最大の円墳、稲荷山北端古墳（第12図27）、稲荷山5号墳（第12図26）と続き、稜線の鞍部、鳥打越よりの稜線との交点に、段築が明瞭に遺存する前方後円墳の稲荷山姫塚古墳（第12図25）が所在する。さらに、南に稲荷山4号墳（第12図24）、1号墳（第12図23）が続く。また鳥打越への稜線上にも二基の積石塚古墳（第12図21、22）がある。

石清尾山地区では、積石塚古墳と土盛り墳が共存するが、概して前者は摺鉢谷の東に、後者は西に分布の中心をもつ。土盛り墳は全てが等質的な横穴式石室墳であり、摺鉢谷の西斜面（第12図B）から石清尾山頂（第12図A）にみられる。また、山麓にも多くみられ、ほとんど亡失した奥ノ池古墳群（第12図D）では20基余の横穴式石室墳が集中していた。

U字状をなす尾根筋の古墳をみると、東北部の先端には前方後円墳の北大塚西古墳（第12図13）、北大塚古墳（第12図12）、方墳の北大塚東古墳（第12図11）が隣接して立地し、それより南



第13図 石清尾山全景

- |               |                              |
|---------------|------------------------------|
| ① 鶴尾神社4号墳     | ⑧ 北大塚古墳・北大塚東古墳・北大塚西古墳        |
| ② 鶴尾神社1号墳～3号墳 | ⑨ 石清尾山9号墳                    |
| ③ 姫塚古墳        | ⑩ 石清尾山14号墳～16号墳              |
| ④ 姫塚古墳        | ⑪ 摺鉢谷東小規模群跡<br>～以上積石塚～       |
| ⑤ 小塚古墳        | ⑫ 石清尾山2号墳ほか摺鉢谷西古墳群（横穴式石室墳）   |
| ⑥ 石船塚古墳       | ⑬ 石清尾山13号墳ほか石清尾山頂古墳群（横穴式石室墳） |
| ⑦ 純塚古墳        |                              |

に双方中円墳の鏡塚古墳（第12図10）、前方後円墳の石船塚古墳（第12図9）、小型の前方後円墳小塚古墳（第12図8）、後円部に顯著な段築の遺存する姫塚古墳（第12図7）と続き、その西方には、多量の出土品と特異な形態で注目される猫塚古墳（第12図6）が位置する。また、北大塚古墳の北東側には2基の小積石塚古墳（第12図16、17）が所在し、摺鉢谷をへだてた西側尾根上には、小型の前方後円墳の石清尾山9号（第12図14、付図IV-③）が位置する。さらに摺鉢谷の谷底に1基（第12図15）、石清尾山頂より東にのびた尾根先端に3基の積石塚の小円墳（第12図18、19、20）が立地する。

一方、姫塚古墳から南東にのびた稜線上に立地するのが、鶴尾神社古墳群で、上方より1号墳（第12図2）、2号墳（第12図3）、3号墳（第12図4）、4号墳（第12図1）、5号墳（第12図5）と続き、4号墳を除いて、同規模の円墳である。

以上の現存する積石塚古墳のほか、京大報告によれば、積石塚古墳及びその可能性のあるものとして、福井山に3基、鳥打越周辺に1基、摺鉢谷東斜面に13基（第12図29）、姫塚古墳の前方部先と猫塚古墳の周辺に各1基、野山4号墳の付近に2基があげられている。また、石清尾山頂にも積石塚の存在が示されているが、「香川県史蹟名勝天然紀念物調査報告」では、これを2基の土盛り古墳とし、現状でも2基の土盛り墳が認められる。また、宝山山頂は、中世山城（第12図k）で削平されている。ここにも積石塚古墳が所在した可能性を否定できない。

（藤井）

（註）

1. 地形、地質の詳細については、「石清尾山塊古墳群調査報告」高松市教育委員会1973を参考にされたい。
2. 「四国地方縄文時代遺跡地名表・香川」瀬戸内海歴史民俗資料館1976
3. 1982・4の試掘調査で、大量的逆丁字状口縁をもつ甕が出土。
4. 稲浪富太郎・六車恵一「高松市天満佐生式造跡」『文化財協会報（特別号8）』1967
5. 1977 調査
6. 芝1に同じ
7. 熊林徳「高松市高松町すべり山出土佐生式造跡報告書」1955
8. 小竹一郎ほか「古高松郷土誌」古高松郷土史編集委員会 1977
9. 1977・78調査
10. 松浦正一ほか「一宮村史」一宮村史編集委員会 1965
11. 実見による
12. 廣瀬常雄「日本の古代遺跡8香川」保育社 1983
13. 芝1に同じ
14. 芝1に同じ
15. 松本豊胤「古代社会の形成、えとのす第5号」新日本教育図書株式会社 1976
16. 1976 調査
17. 「高松市円糸寺遺跡調査概報」円糸寺遺跡発掘調査団 1971
18. 「高松市三谷町通谷遺跡調査概報」高松市教育委員会 1974
19. 「高松市茶臼山古墳調査概報」茶臼山古墳発掘調査団
20. 青井常太郎「唐岐香川都志」香川県教育会香川郡部会 1944
21. 高橋邦彦・森井正・六車恵一・松本豊胤「さぬきの遺跡」美巧社 1972
22. 廣瀬常雄「香川町・船岡山古墳調査報告」香川県教育委員会 1980

23. 香川恵司「讃岐（香川県）の石棺」考古学研究集録第12号 1976
24. 香川県史跡名勝天然記念物調査会「史跡名勝天然記念物調査報告 第一編第五回古墳」香川県 1922
25. 許1に同じ
26. 1977 調査
27. 1972 調査
28. 墓9に同じ
- 松本敏三「久木古墳、横穴式石室の一例『教育香川』」1977
29. 大山真充ほか「高松市・山下古墳調査報告」香川県教育委員会 1980
30. 「畠島城跡」高松市教育委員会 1981
31. 潤源茂樹「仏教文化の繁栄！香川地方史研究会編『讃岐の歴史』講談社 1975
32. 「香川県の文化財」香川県文化財保護協会 1971
33. 梅原木治「讃岐高松石清尾山石塚の研究」京都帝國大学文学部考古学研究報告第十二冊 1933
34. 許1に同じ
35. 許1に同じ
36. 調査によれば、両端に短かい方墳をもつ墳形の可能性がある。
37. 許1許33では、古墳と記載されていないが、調査によれば横峰1号墳と似た扁平な横丘をもつ円墳と考えられたので、新たに古墳とした。その他、この附近には石の集積が多く、調査の必要性がある。
38. 許1では円墳、許33では前方後円墳とされ、4号墳とあわせて双方中円墳とする説もある。本報告書では、前方後円墳説を採用した。
39. 双方中円墳（二隅突出墳）と考える説もあり、墳形の確定については、今後を待ちたい。

## [III] 墳丘

### (1) 立地

鶴尾神社4号墳は、姫塚古墳の所在する頂部から、南東にくだる尾根の中ほどに位置する。

(図版1-1) 単調な地形を呈する尾根にあって、鶴尾神社4号墳の位置するあたりが、狭いながらも、テラス状に突き出した変化のある地形となっている。

鶴尾神社4号墳は、そのような地形に築かれた積石の前方後円墳で、石清尾山古墳群中最も南に最も低く位置する。前方部を頂部にむけ、後円部をテラス状地形の最先端にのせる。従って、後円部は平野部から仰ぎみたとき、後述する段築とあわせて、規模の広大さを感じることができる。

石清尾山頂部に所在する他の主要な積石塚古墳が、必ず海をながめて占地するのに比べ、鶴尾神社4号墳からは、北々東の鳥打越を通してわずかに海がみえるのみで、海上に存在を誇示することはほとんど不可能である。

しかし、淨願寺山東麓から室山南麓までの石清尾山塊の山裾はもとより、南にひろがる高松平野を一望のもとに臨むことができ、あきらかに高松平野を意識した立地と考えられる。

また、姫塚古墳をはじめ、その左手には、猫塚古墳を、転じて右手には小塚古墳・石船塚古墳・鏡塚古墳を、さらには室山地区の稻荷山1号墳・稻荷山姫塚古墳・稻荷山北端古墳と、石清尾山古墳群の主要な積石塚古墳の多くを望見でき、群中にしめる鶴尾神社4号墳のすぐれた位置がうかがえる。

### (2) 用材

墳丘を構成する石材は、ほとんどが安山岩で、幾つもの不規則な面を持った塊石と、厚さ5cm前後の板石、細かく砕かれたバラスに分けられる。

そのうち、塊石は30~50cm余が平均的な大きさで、用材の大部分をしめる。荒々しく積みあげられた塊石の間には、小さな空間がいたるところにみられる。

板石は、竪穴式石室やくびれ部に使用されているが、周辺に散乱する塊石と違い、付近にみあたらず、採集地は不明である。

バラスは、集中する箇所、塊石の間に散在する箇所、全くみられない箇所と様々で、墳丘全体には一様に分布しない。

それらの石材と比べ、あきらかに異質な河原石が、バラスに混ってみられる。後円部竪穴式石室の周囲が最も多く、前方部ではくびれ部からその中程にかけて散在する。

墳丘は露岩によって大きな影響をうけている。前方部先端などに一部整形を指摘できるもの

の、大部分は放置されており、特に墳丘西側では、前方部墳裾が露岩のために切断される。東側でも、発達した露岩のため、前方部の墳裾はほとんど確認できない。

### (3) 墳丘細部（前方部）

前方部先端では、北西部の墳裾列石（図版6-1）が検出された。列石は比較的整った塊石の面をそろえ、岩盤上や、その上にごく薄くみられる土上に、しっかりと並べられたもので、平面的には直線をなす。主軸の東側では、列石の延長線にそって、露岩がL字状に削りとられたように観察できる（図版7-2）。削平面に塊石が並べられた可能性もあるが、岩盤である地山を整形した例として注目される。

前方部の側面の墳裾についても、西側の遺存状況がよく、東側では前方部の中程に延長2m余の列石がみられるにすぎない。その列石は西側に比べてやや小ぶりの塊石で構成されたもので、延長は検出できなかった。前方部東側墳裾の列石の可能性が考えられる。

西側では、その中程にみられる巨大な露岩で、墳裾が断ちきられるが、概して遺存状態がよい。しかし、前方部先端よりと、くびれ部側では、使用された石材に著しい差異がみられる。

前者では、前方部先端と同様な塊石による列石が墳裾（図版8-1、2）を形成する。先端部コーナ（図版6-2）については、墳裾の列石の遺存は認められなかった。前方部先端と、西側の墳裾列石を延長して、鋭角をなす前方部コーナを復元することができるが、あるいは、若干隅丸状となる可能性も残る。

くびれ部では、板石を岩盤直上に三枚ないしは四枚程度重ねた列石が検出された。（図版9-1、2）後述する石室の壁の手法と共通する。

また、西側面の前方部先端よりの列石の内側には、バラスを敷いて平坦面を形成し、さらに、内側に塊石を任意に積みあげて墳丘を盛りあげるが、一部には規則性がうかがえる箇所もある。その最高所には盗掘坑があるが、内部施設等は観察できない。くびれ部は、露岩や、その直上に塊石がおかれた程度で、前方部全体では、低平な墳丘を呈する（図版5-2）。

### （後円部）

採石で約近くを欠損した後円部（図版4-2）西側の墳裾で、4段の段築を検出した。（図版10-1）なお、墳頂部付近まで、さらに数段の段築があると考えられるが、時間的な関係から調査できなかった。検出された段築は、上方の段ほどバラスの多い、塊石の乱石積で、テラス状の面にはバラスを敷きつめている。各段の落差は、前方部側で20cm前後、地形にそって段がくだけた後円部の南よりでは、60cm余となる。最上方の段は、くびれ部の列石に続く。その下段もくびれ部の列石につきあたり（図版9-2）、前方部と後円部が当初から計画的に、かつ同時に築造されたことを示している。

後円部東側でも同様な段築が2段検出された（図版10-2）。西側の段と著しく対称性を欠

くが、これは、後述するように、墳丘外にあたる下位の段が、くびれ部近くまで、築かれた結果であろう。また、その付近と西側くびれ部の列石周辺で、多量の土器が出上した。

後円部本来の墳標は、最下段の段築でなく、くびれ部の列石が続く最上段の段築がこれにあたる。以下の段は、稲荷山姫塚古墳にもみられるように、一応墳丘外にあたり急峻な山肌に高く墳丘を築きあげるために必要な構造上の問題解決のためと、下方から見あげたときに、実際以上に墳丘を巨大視させるためなどの理由が考えられる。

これらの結果から、本来の墳丘を復元すると、付図IVのようになり、各数値は下記のとおりである。

全長	40m
後円部径（主軸に平行）	18.7m
" (" " 直交)	18m
前方部長	21.3m
" 先端幅	10.6m
" 最狭幅	4.5m
くびれ幅	7.1m
前方部バチ状部分の長さ	約15m

以上のことから鶴尾神社4号墳は前方部がバチ状にひらく古式な様相をもち、しかも、他の前方部がバチ状にひらく古墳とくらべ、ゆるやかにかつ大きくひらくバチ状部といえる。

前方部の長さにしめるバチ状部の比率は、爺ヶ松古墳では、0.57余の値をとるのに対して、鶴尾神社4号墳では0.70余の値をとる。

また、主軸とバチ状部側面墳標がなす角は、爺ヶ松古墳では、 $150^{\circ} \sim 160^{\circ}$ 、鶴尾神社4号墳では $165^{\circ}$ 余をなす。

なお、前方部のくびれ部付近墳標も、互いに平行することなく、後円部にむかってややひらき気味である。

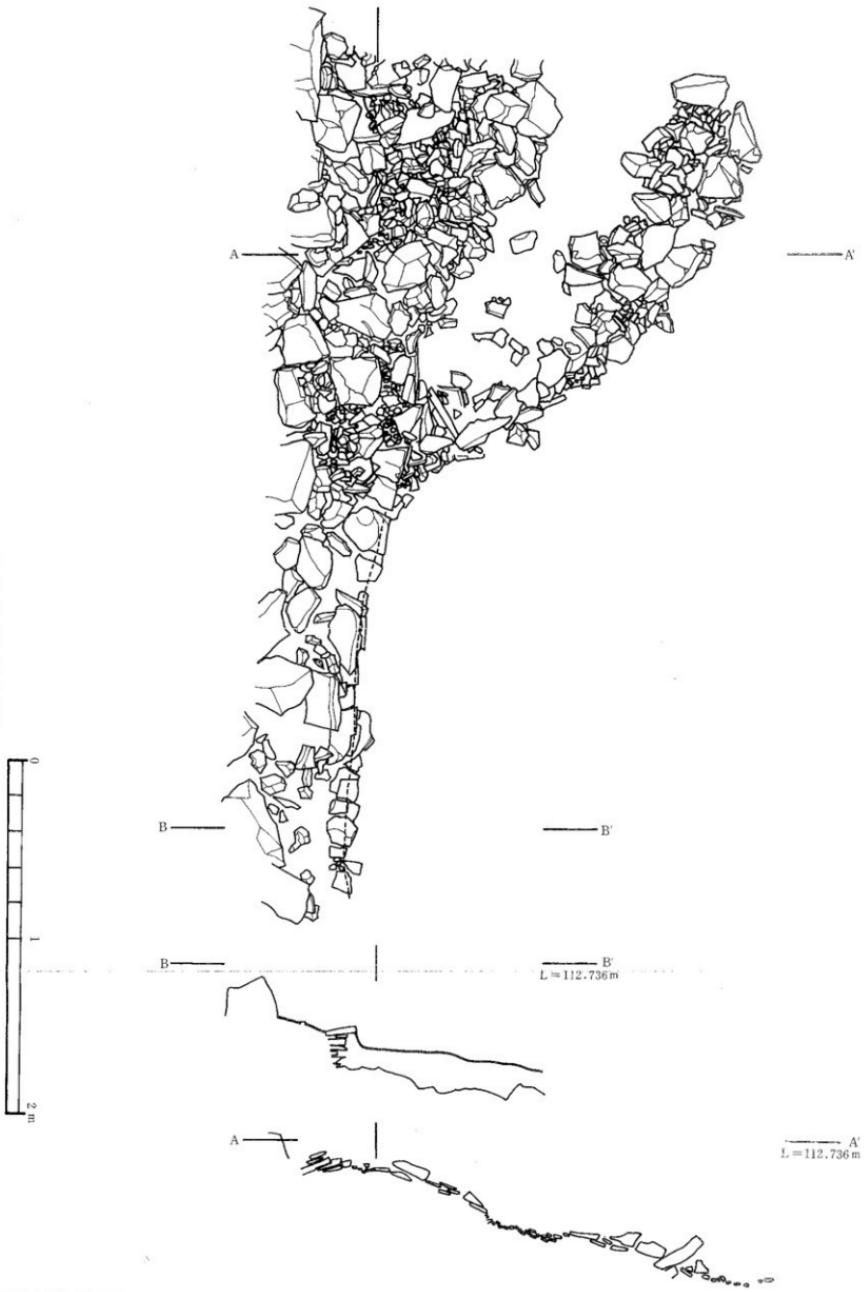
後円部の墳頂平坦部分南よりに竪穴式石室がみれるが、しかし、付図IVによれば、後円部の中央に石室が位置するようになる。

#### (4) 墳丘外

前方部に連続して、約8m四方の石の堆積がみられる。前方部先端の列石を検出したときの観察では、古墳から転落した塊石に板石等が覆いかぶさっている（図版7-1）。従って、人工の石積みと考える。鶴尾神社4号墳の築造後、いくらかの時間を経て築かれたものだろう。

さらに、鶴尾神社4号墳と上方の鶴尾神社3号墳との間に、列石と思える塊石群が認められた。

第4図 くびれ部実測図



この両者の性格、内容については、調査圏外だったので、今後の課題といえる。（藤井）

### (3) 墳丘復元について

鶴尾神社4号墳は調査によって前方後円墳であることは確かめられたが、墳壠の保存が悪いことや、後円部の多くの段築などのために、墳形や墳丘規模を必ずしも明確にできなかった。墳丘規模を確定するためには墳丘の発掘も必要であるが、ここでは一応、これまでの調査にもとづいて墳丘の復元を試みることにする。

墳丘及び墳被部の調査によって、いくつかの部分で墳壠と思われるラインが検出できたので、それを墳丘復元の基準とした。

前方部先端の北西側部分、前方部西側の先端寄りの一部では、やや大形の割石が岩盤上に据え並べられた状態が認められたので、これを墳壠とみなした。また、西側くびれ部付近の前方面では、岩盤上に、小口を掘った板石を3~4段に積み上げているので、このラインも墳壠と考えた。このラインは後円部側になると板石を用いない段のラインとして、そのままゆるく弧を描くよう続くが、板石積みが終わる部分で、別の段がここから派生するように構築されている。この段の石材の一部は、前方部から続く石材の下になっているので、両者が同時に構築されたことがわかる。後円部西側には、さらに下方に二段の段築が認められるが、現状ではこれは前方部まで続かない。墳丘外の段築を考えた方が良いのではないかと思われる。

一方、墳丘東側ではほとんど墳壠が残っていないかった。ただ、前方部ほぼ中央で、やや大形の7石が並んでいたので、これが墳壠である可能性を考えることができる。後円部側では二つの段が確認できたが、前方部との関係がわからず、しかも墳丘西側と対称とならなかった。後述するように墳丘外の段築ではないかと思われる。

以上の結果から、前方部先端の位置は容易に確定できる。また、前方部西側の墳被は、現存する部分から復元することが可能である。西側の後円部では、上方の二つの段の下端のラインが墳壠の可能性が強い。

東側墳被はほとんど残っていないので、推定復元された西側墳被を反転して求めることにした。その場合、前方部東側ほぼ中央の石列は、前方部の幅を推定する目安となった。ここでは、前方部先端のラインを基準とし、前方部西側の復元ラインが、前方部東側の7石のほぼ中央を通る復元を考えた。この場合、前方部先端近くでは、東側の墳被のレベルが西側より若干高くなるものの、それ以外ではよく一致し、地形的にも無理のない復元であるように思われる。一方、後円部の東側推定墳被は、東側で検出した二つの段のかなり内側をとおるが、この推定墳被と二つの段築との間からは、西側くびれ部の墳丘外と同じく多量の壺の破片が出土しているので、この部分も墳丘外である可能性が高い。後円部東側では、検出された二つの段築の内側は詳しい調査を行っていないので、今後の調査によって、墳壠が確認される可能性が残されている。

以上の手法によって復元された、鶴尾神社4号墳の規模は前述のとおりである。ただ、後円部の墳壠が、西側くびれ部から派生した段（別添墳丘図の上方から2番目の段）だとすると、後円部の直径は約20.2m、全長約41.5mとなる。また、後円部の墳丘外最下段の直径は約25.3mである。これに前方部の長さ21.3mを加えると46.6mであるが、これは、今まで考えられていた全長47mに近い。（渡部）

## [IV] 石室

鶴尾神社4号墳は、後円部に構築された竪穴式石室を内部主体とする。この竪穴式石室は、後円部墳頂のやや先端寄りに古くから開口していたもので、石室の一部はすでに写真で紹介されている。<sup>(1)</sup>これまで、この竪穴式石室は後円部中央よりやや先端寄りに位置すると考えられてきたが、後円部を推定復元すると、ほぼ中央に位置することになった。<sup>(2)</sup>後円部には以前から、やや前方部寄りにも別の竪穴式石室が存在するのではないかと考えられているが、これについては調査しなかった。また、今回の調査では墳丘積石の発掘を行わなかったので、前方部などにおける埋葬施設の有無についても確認していない。

後円部の竪穴式石室(付図III)は、以前から天井部をすべて破壊され、半ば埋った状態で露出していたが、昭和55年夏に後円部が削られた結果、石室東側は小口壁の石積みの外側まで破壊されてしまった。しかし発掘調査によって、下部の比較的保存の良い竪穴式石室が、墳丘主軸と斜行して東西に検出された。石室の方位は磁北を基準にするとMN-93.5°-Wである。

石室の規模は内法で長さ約4.7m、幅は東小口付近で1.01m、中央部で1.11m、西側小口付近で1.23mを計り、平面プランは西側がやや幅広の長方形を呈する。側壁は東側小口壁と、南側長側壁の東部が最も保存が良く、この部分での高さは約1.6mを計る。北側長側壁と西側小口壁は高さ約1m、南側長側壁は約1.5mほど残っているが、北側長側壁の東部と、南側長側壁の西部は壁面が部分的に崩壊している。

側壁はすべて板状安山岩で構築している。石材は内壁面での長さ20~60cm、厚さ5cm前後の大きさのものを小口積みにしている。壁面の下部にはやや大きく、厚めの石材を多く用いる傾向があるが、顯著ではない。各壁とも、床面から50~60cmの高さまでは石材の面を精緻に揃えて垂直に積み上げるが、それより上部は持送りをもたせている。石材は、縦の継ぎ目はジグザグになるように積み、横の継ぎ目は水平によく通っている。

各壁のコーナーは、壁面を垂直に積み上げる高さ(床面から50~60cm)までは、直角に構築するが、それより上部には、両壁にまたがって、隅丸状に配される石材も認められる。壁面上部の保存が良い南東部のコーナーでは、上部ほど顯著な隅丸状となる構造をうかがうことができる。

天井部は調査前になくなっていたが、墳丘や周辺の調査によても、天井石の可能性のある大きな石材は全く認められなかった。また、石室内には多量の石材が落込んでいたにもかかわらず、それらしい石材が全く確認できなかったことからすると、この石室は本来大きな天井石を持たず、いわゆる合掌構造か、それに近い構造であった可能性が強いものと思われる。そう

した場合、石室の高さはもともと1.8m以上あったと考えられる。

床面は、東端部とやや西寄りの大きな部分がえぐられているものの、本来粘土床であったことが認められる。粘土床は、側壁に沿った周囲が高く、内側が浅く凹む構造であったようだ。石室中央部の横断面をみれば、中央部の幅50~60cmほどが6cmほど深く凹んでいる。粘土床の形から、剖竹形木棺の存在を想定することは困難であるが、若干丸みのある底部をもった木棺が存在したのであろう。

そして、この粘土床の凹んだ部分には、幅40~50cm、長さ約1.8mにわたって朱が認められる。朱の散布は、石室東端より約76cmのところから西の部分に認められるが、その西端は、盃掘穴によって破壊され、本来の散布の範囲はわからない。

粘土床のレベルは、比較的保存の良い側壁ぎわでみると、西側がわずかに高いようである。しかも、この部分の石室幅が広いことも考えると、遺体は西枕であったものと想定することができる。

ところで、床面に掘られた盃掘穴の断面をみれば、長側壁は粘土の上に構築されていると共に、側壁最下段の約2石をかくす程度に粘土を敷いて、粘土床としていることがわかる。そして、粘土の下は土砂を全く含まない石積みであり、しかも下部ほど大きな割石を用いている。

のことから鶴尾神社4号墳の石室の構築を考えると、まず、30cmをこえる塊石を積み上げて墳丘を構築してゆき、次いで石室の基礎とする意味から、10cm程度の塊石を20cm程度の厚さに敷いて上面を揃え、その上に10~20cm程度粘土を敷いた上に側壁を構築し、最後に側壁最下段の2石程度をかくすように粘土を側壁ぎわに敷いて中央部を凹ませ、粘土床としたようである。

石室の発掘時に床面を精査したにもかかわらず、獸帶方格規矩四神鏡片1と上器片以外の遺物は発見できなかった。後述するように、鏡片、土器片とともに埋土中から発見されたので、本来の副葬状態は明らかでない。一方、獸帶方格規矩四神鏡は、土器、刀剣と共に出土したとの伝えがあるので、鶴尾神社4号墳の石室にこれらがかつて副葬されていた可能性はあるが、今回の調査ではその確認は得られなかった。(渡部)

#### (註)

1. 梅原末治「讃岐高松石清尾山石塚の研究」京都帝国大学文学部考古学研究報告第十一輯 1933

2. なお、これまで整穴式石室が後円部先端よりに位置すると考えられたのは、傾斜する尾根筋に後円部が構築されたため、後円部墳頂平坦面が前方部側によって、石室が視覚的に先端側へよって見えたためかもしれない。

3. 註1に同じ

## (V) 出土遺物

調査によって、石室内・墳丘・墳帽から多数の土器片が出土したほか、石室内から獸帶方格規矩四神鏡の破片が出土した。なお、石室内から出土したのは土器片と鏡片のみで、鉄器や玉類は発見されなかった。

### (1) 獣帶方格規矩四神鏡 (第15・16図、図版15・16)

内区から鏡像にかかる約四分の一の大の破片で、昭和55年度の調査によって出土した(図版15・2)。出土位置は石室のほぼ中央、盜掘穴の東端付近の、床面レベルより20cmほど上の埋土中である。この鏡は、姫塚古墳あるいは「土居の宮後丘上の一古墳」(鶴尾神社4号墳を指す)の出土品として紹介された獸帶方格規矩四神鏡の欠失部分であり、この鏡片の出土によって、ごく一部の欠失部分を残してほぼ完形となった。

出土した鏡片は、内区に白虎と思われる獸形の頭部と靈獸、外区に獸帶文を持ち、鏡背に向って左側の割れ口に沿って、方格上と斜行柳歛文上に二孔が穿たれている。既出の部分と同じく、斜行柳歛文を除く内区の文様は全体に不鮮明である。方格内の乳間には十二支銘の痕跡を残すが文字は全く判読できず、四葉座乳の四葉も先端ははっきりしない。規矩文は二重の陽線で表現され、これもやや不明瞭であるが、詳細にみると二重の陽線の内側より外側の輪郭がより不明瞭であることがわかる(図版16-1)。

四神文様の外側には円彫を挟んで錦帶がある。銘文は、内区の文様に比べるとやや鮮明である。漢隸で記された四文字があり、「之爲鏡清」と読める。これによって全体の銘文は、「漢有善銅出丹陽取之爲鏡清如明左龍右虎備三」と20字となり、文意も完全となった。なお、かつて梅原氏はこの部分を「之爲竟清□」と復元したが、これは他の銘文に比べて、この部分の4文字がいくぶん間隔をあけているため、不明な1字を加えて5文字としたのであろう。内区の最も外側に位置する斜行柳歛文は明晰に鋳出されており、内区の他の文様と著しい対比を示す。

外区は一段高くなり、二重の円筒の間に獸形を配した唐草文を表現し、内側の円筒の内区側に珠文を鋳出している。唐草文や獸形文はやや幅広の陽線で表現され、一部は珠文帯にも及んでいる。獸形文や唐草文は比較的シャープであるが、これを挟む円筒の外側、例えば獸形の頭部や珠文、鏡縁付近は輪郭がやや不明瞭となっている。また、内区から一段高くなった外区の肩や、鏡縁は角が丸くなっている。

調査で出土した鏡片は2つの割れ口をもっているが、補修孔を持つ割れ口は漆黒色を呈し、割れ口が磨滅しているのに対して、他方は白銅色で磨滅も認められない。このことは既出の破片においても観察できるので、補修孔を持たない割れ口は新しいものであると考えることがで

きよう。しかも、今回出土した鏡片の割れ口のうち、一方が古く、一方が新しいということは、本来これが鏡片として副葬されていたのではなく、完形品として副葬されていたものが、恐らくは盗掘時にさらに破損され、取り残された結果、今回の調査で出土したということを物語るのであろう。したがって、從来姫塚古墳出土とも、鶴尾神社4号墳出土とも伝えられていた獸帶方格規矩四神鏡は、鶴尾神社4号墳に副葬されていたと考えてほんば誤りはないものと思われる。

補修孔のうち、斜行櫛歯文上にあるものは、鏡背面側の直径約3.5mm、鏡面側の直径約3mmを計り、鏡背面側に開いた漏斗形を呈する。これに対して内区方格上の孔は鏡面に開いた漏斗形を呈し、背面側の直径約2mmである。既出のものも含めて、これのみが鏡面側から穿孔されている。補修孔の内面は漆黒色を呈し、肩は顯著な磨滅を受けていない。なお、既出の破片の6個の補修孔は、いずれも背面側で直径約2.3~3mm、鏡面側で直径約2mmを計る漏斗形を呈する。

直径18.2cm、面の反り約2mm、内区の厚さ3mm前後、外区の厚さ4.5mm前後を計る。

## (2) 土器 (第17図、図版19・20・1~20・6)

石室内や後円部墳頂、墳裾付近の墳丘内外から多量の土器が出土した。<sup>(2)</sup>このうち、石室内と石室付近の後円部墳頂から出土した土器は、量は特に多くないものの、丹塗りや、ヘラ描文様を持つものが少なくなかった。ただ、石室内から出土した土器が、石室内の副葬品であったという証拠は確かめられなかった。土器片は石室の埋土中から小片となって発見されたものであり、石室内出土の土器と墳丘出土の土器が接合する例も多く、本来墳丘にあったものが転落した可能性が強いものと思われる。一方、後円部墳頂でも、別の石室が存在するのではないかと考えられている前方部寄りの部分からは、ほとんど土器は出土しなかった。

墳裾付近の墳丘内外からは、ほぼ同種の壺のみが多量に出土した(第17図14~18・20・21)。原位置をとどめて出土したものはなかったが、前方部西側墳裾や東西くびれ部付近の墳丘内外に特に多かったことからみて、墳裾部ないしは、墳裾に沿った墳丘上に立て並べられていたものと思われる。

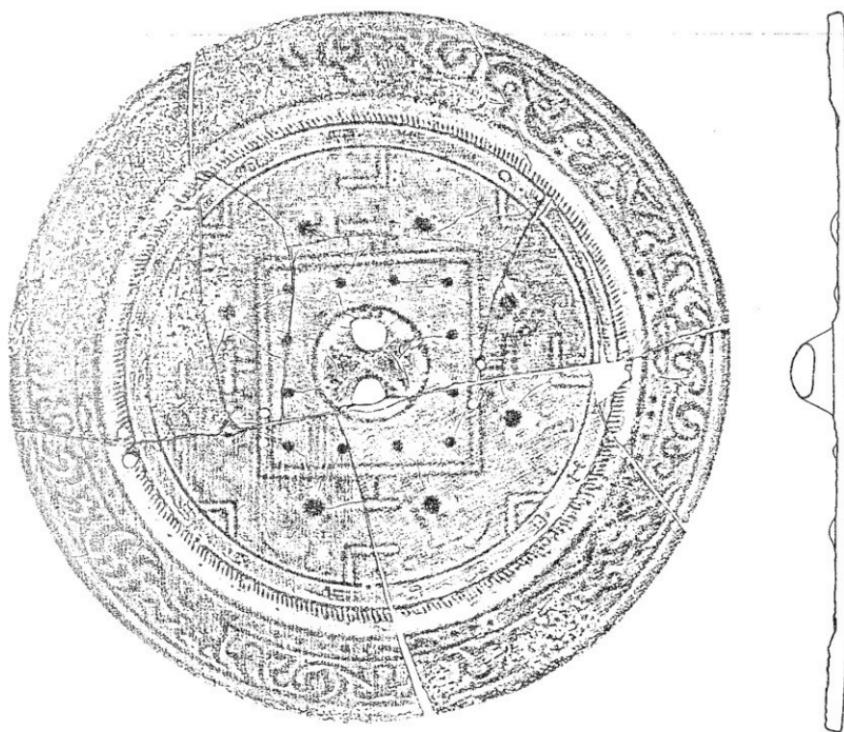
第17図1は石室内から出土した壺で、あまり大きく広がらない口縁部をもつ。復元口径は約13cmで、口縁端部は丸くおさめられている。内面は磨滅のため調整はわからないが、外面はヨコナデのあと、タテのヘラミガキを施している。黄褐色を呈し、砂粒をほとんど含まない良質の胎土をもつ。

2は水平ぎみに外反した口縁部をつまみ上げた壺で、石室内から出土した。復元口径は約14.2cmである。外面は丹塗りで、ヨコナデ調整が認められる。内面は、筒状部分にはハケ目が施され、その上部はヨコナデの上に斜のヘラミガキを施す。胎土は1に類似する。



第15図 眼茶方格規矩四神鏡 ( $S = \frac{1}{2}$ )

图16圆 新常方格规矩四神钱拓本 ( $S = \frac{1}{2}$ )



3は二重口縁の壺で、口縁部を欠失しているが、屈曲部の上半は短く終るものと思われる。頸部内外面にはハケ目が認められるが、その上からヨコナデを施している。暗黄褐色を呈し、胎土は良好で、微小さな砂粒をごくわずかしか含まない。石室南側墳頂部から出土した。

4は直線的に外反した口縁部をもつ壺で、復元径は約7.8cmである。器壁は薄手で、内外面暗赤褐色をしている。石室内からの出土。

5は壺の頸部で、頸部の形態や胎土・色調は2に類似する。頸部外面はヨコナデの上をタテのヘラミガキとし、内面の下半はヨコナデ、上半はヨコのヘラミガキである。石室内から出土した。

6・7は長くのびた頸部を持つ壺で、いずれも石室内から出土した。6の頸部は内湾しながらのび、外面はヨコナデ調整、内面はユビオサエの後、部分的にヨコナデを施している。7は直線的に頸部がのびる。外面には糊、タテのヘラミガキを施し、内面は6と同じく、ユビオサエのち、部分的にヨコナデを施す。内面には顯著な絞り目が認められる。6は暗黄褐色を呈し、胎土に1mm大の砂粒を少量含む。7はやや暗い灰褐色で、胎土に砂粒をあまり含まない。

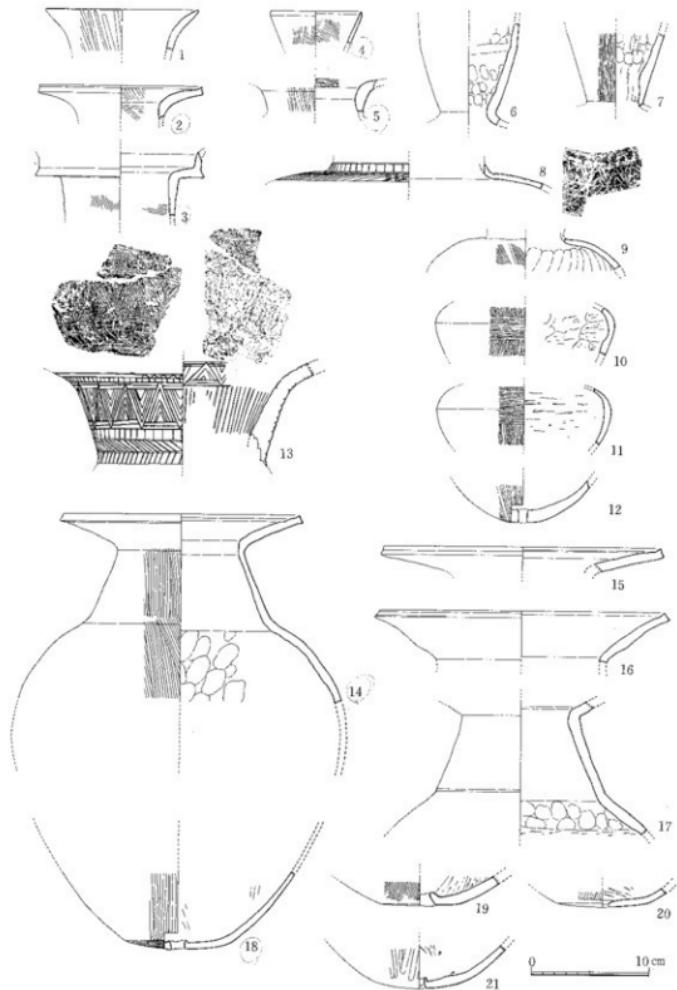
8は壺の肩部で、石室内と後円部墳丘の出土破片が接合した。頸部の復元径約13cm、肩部は大きく張り、外面にはヘラで梯形文・複線複合山形文・斜線文などを描いている。外面にはタテのハケ目を施し、内面はユビナデで調整している。

9も壺の肩部であるが、8ほど肩が張らない。外面は丹塗りで、斜のハケ目の上に部分的にタテのヘラミガキを施している。内面には顯著なヘラケズリが認められる。石室内から出土した。

10・11は、6・7などの頸部と合させて長頸壺の体部になるのであろう。10の内面にはヨコのヘラケズリを施し、外面には最大径の付近のみヨコのヘラミガキ、その上下はタテのヘラミガキを施す。この種の体部の外面はすべて同じ調整を施しているので、11の外面も頸部に近い肩部にはタテのヘラミガキを施すものと思われる。10・11とも、やや暗い灰褐色で、胎土に1mm大の砂粒を少量含む。11は墳丘と石室から出土した破片が接合し、10は石室の出土である。

12は壺の底部で、焼成前の穿孔をもつ。底部の平坦面はほとんど認められない。外面は丹塗りで、タテのヘラミガキを施し、内面はナデで調整している。後円部墳頂の出土。

13も後円部墳頂から出土した。大きく外に聞く壺の頸部で、内外面に多様なヘラ描文様を持つ飾られた土器である。外面には波状文・梯形文・複線複合山形文・梯形文・綫衫文などをありますところなく描き、内面にも複線複合山形文の下にタテの平行線文を施している。内面は器壁の磨滅が著しくて調整がわからないが、外面の上部はタテのハケ目、下部はヨコナデを施す。頸部の復元径は約7.2cm、淡褐色～灰褐色を呈し、胎土に1～2mm大の砂粒を少量含む。器台の可能性も考えられる。



第17図 鶴尾神社4号墳出土土器実測図

14-18・20・21は墳壙付近に立て並べられたと想定している壺形土器である。  
14は西側くびれ部の墳壙から出土したもので、口縁部の復元径は約20.6cmを計る。肩部が張  
るが、小形の壺ほどではなく、頭部は太く、内傾しながら長くのびて、口縁部は頭部から大き  
く屈曲して直線的に外反している。頭部は高さ約6.5cm、上端の外径約10.8cm、下端の外径約  
16cmを計り、体部の最大径は推定で28cm前後になるものと思われる。口縁端部は若干拡張ぎみ  
で、内面には二条の浅い凹線をもつ。口縁部内外面はヨコナテ、頭部から肩部の外面はクテの  
で、内面にはユビオサエが顕著である。また、頭部の内面にもユビオサエが  
ハケ目を施し、肩部の内面にはユビオサエが顕著である。また、頭部の内面にもユビオサエが  
認められる。淡褐色～暗灰褐色を呈し、胎土に1～2mm大の砂粒を少量含む。外面には丹塗り  
の痕跡が認められる。

の痕跡が認められる。

15、16とも西側くびれ部付近から出土した口縁で、復元径は24~25cmである。墳頂付近から出土するこの種の壺は、内傾した長い頭部に、大きく屈曲した口縁部を持つという基本的な形は一定しているが、個体によって、口縁部の傾きや、細部のつくりに個性が認められる。15は口縁部の内面に3条の凹線が施されている。16は口縁部の傾きが大きく、内面の凹線は1条のみである。16の外側には丹塗りの底跡が認められる。

みである。16の右側には刀剣の跡がある。  
17は東側くびれ部付近から出土した頭部で、14に比べるとやや厚手のつくりである。肩部内面には、ユビオサエの下にヘラケズギが施されている。内外面とも磨滅が著しいが、外面には長條りの擦跡がある。

18は前方部から出土した。直徑8~9cmの丸底ぎみの底部に、約1cmの孔が焼成前に穿たれている。内面はナデ調整で、体部外表面はタテのヘラミガキ、外底面は平行のヘラミガキを施している。

別個体ではあるが、14と18からみれば、墳丘出土の土器は高さ37cm前後、体部最大径28cm程度の大きさで、丸底ぎみの平底を持つことになる。

の大きさで、丸底をうつす。19は石室内から出土したので、後円部墳頂出土の大形壺の底部となる可能性がある。底部には直径 2.2 cm の孔が焼成前に穿たれている。体部内面はヘラケズリ、外面はタテのハケ目、外底面は一定方向のハケ目で調整している。

20・21は墳頂周辺から出土した底部で、いずれも内面はヘラケズリ、体部外面はタテのヘラミガキを施している。21は底部の丸底化が著しく、外底面をナデで調整するが、20の外底面には平行のヘラミガキを施す。20の底部の孔は焼成後の穿孔である。

(3) 土器文様 (第18・19図)

(4) 石室の文様  
石室内や石室周辺の墳丘上から、ヘラ彫文様を持つ壺の破片が多數出土した。特に石室から  
の出土は全体の約6%に達する。しかし、墳丘出土の文様と異なるものは認められなかった。第  
18図4は前方部先端の壺底から出土した。石室出土の第18図3と類似した口縁部であるが、石

室及び周辺の埴瓦以外から出土したのはこの1点のみである。なお、ヘラ描文を持つ破片の約半数には丹塗りが認められる。

口縁部に文様を持つのは大形の壺に限られる（第18図1～4）。1の内外面には綾杉文を描き、外側には複線複合山形文も加える。口縁部の端面には、上下に平行斜線文を持つ梯形文を描いている。2の内面には、二重の沈線の間に、直線と曲線で描かれた文様を持つ。外面にも斜線文が認められる。3・4は、内面に梯形文と、その外側に粗い櫛歯状文様を持つ。

頭部（5～8）もすべて大形壺の破片である。5は口縁部に近い破片と思われるが、内面に綾杉文、外面に連続する重弧文を持つ<sup>(3)</sup>。6・7の内外面には複線複合山形文が描かれ、8の内面には直線と「V」字状文様を持つ。

10は頭部の最下部で、第17図8と同一個体である。これによって、梯形文の上に、平行斜線文ないし綾杉文がめぐらされていたことがわかる。9・11は頭部に近い肩部で、平行線や綾杉文が施されている。いずれも小形の壺である。

12は肩部の破片で、同じ文様はもう一片出土している。頭部近くに二重の沈線をめぐらし、その下に上向きの重弧文を描いて内部を平行線で埋める。その下には綾杉状の平行斜線文を描く。

体部の破片には各種の文様がある。これらは本来組合せて描かれていたのであるが、小破片のため、文様構成を把握できないものも多い。

13は二段の綾杉文の下に梯形文を描き、さらに下に2本の横線を施す。そして、破片の左下の割れ目は、この2本の横線を斜めに切る沈線であることから、これが複線複合山形文の一部であることがわかる。

14～32は綾杉文ないし、綾杉状の文様である。

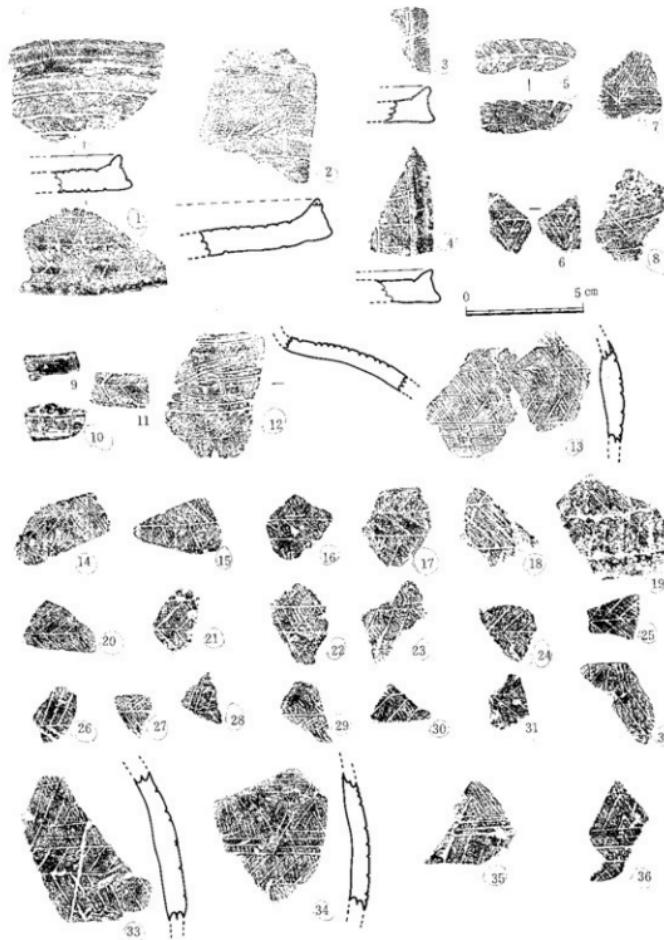
33～36は複線複合山形文を持つ破片である。33～35の下部には綾杉文が描かれ、34の上端には梯形文の一部がわずかに認められる。36は本来、上下逆転するものと思われ、複線複合山形文の上部に描かれた梯形文と、綾杉文の一部がみえる。

33・35・36は、調整、埴土、焼成、器壁の厚さなどが13に類似しているので、同一個体の可能性が強い。なお、33の文様は、綾杉文の下端の横線で終るのではないかと考えられる。

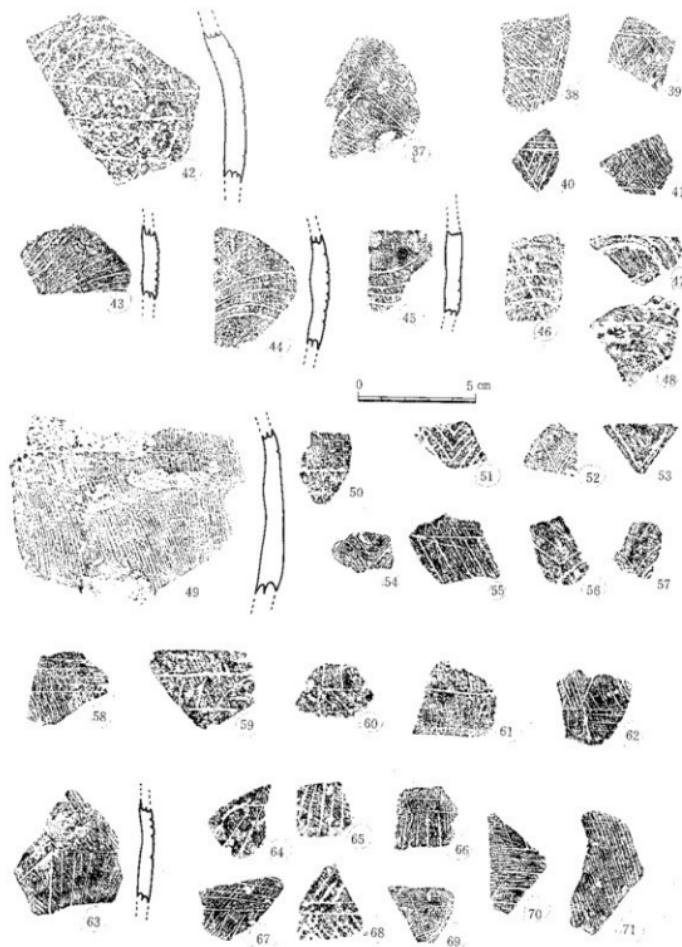
第19図37～41は複合鋸歯文を持つ。37・41と38の一部には、綾杉文の一節と思われる平行斜線文があり、39、40には平行直線文が描かれる。

42は表面の磨滅が著しいためにはっきりしないが、横走する三本の直線と同心円ないし渦巻状の曲線を組合せている。46・48も同じ文様の一部であろう。

43・44・45・47は放射状の曲線文様を持つ。曲線には時計まわりのもの（43・44）と、逆時計まわりのもの（45・47）とがある。



第18図 鶴尾神社4号墳出土土器文様(Ⅰ)



第18図 鶴尾神社4号墳出土土器文様(II)

49・50は梯形文である。49は大形壺の体部最下段の文様として描かれている。  
51～54・56・57は、単線あるいは複線で「V」字状の文様を描く。51・54では、左上方にの  
びる線が、別の斜線で切られる。また、54・56では、左上方にのびる線の数が多くなっている。  
51の胎土・焼成・色調は43に類似しているので、こうした曲線文の中心部となる可能性がある。  
55は平行斜線文の上に、斜行稜杉文ともいるべき文様が描かれる。70の上部も同様な文様と  
思われ、他に2例出土している。  
59は平行横線の間に、直線と曲線の文様を持つ。62・63は複雑な文様を構成するが、全体を  
明らかにしがたい。(渡部)

(註)

1. 梅原末治「讃岐高松石浪尾山石塚の研究」 京都帝国大学文学部考古学研究報告第十二冊 1933
2. 石室内や後円部埴頂からは遺物箱で1箱余、埴頂付近では5箱余の土器片を得た。
3. なお第18図5の下図(外面)は、上下逆である。

## (VI) 讃岐における積石塚古墳の分布

讃岐に多く立地する積石塚古墳は、はやくから注目されていたが、詳細な分布状況は判明していない。そこで、鶴尾神社4号墳や石清尾山古墳群をはじめとした積石塚古墳の実態を明らかにするため、調査を契機に県内各地に及ぶ踏査を実施した。

### (1) 総数と墳形

積石塚古墳と確認できるもの50基、消滅はしているが、文献等で存在が確認されるもの24基<sup>(1)</sup>で、総数74基を数える。<sup>(2)</sup>内訳は、前方後円墳22基、双方中円墳2基、円墳23基、方墳4基で、墳形の不明なもの23基である。

なお、積石塚古墳とされている聖通寺山古墳（図版28-2）は、小塊石が厚く葺石状に墳丘の全城を覆い、かつ、同様な石材を多量に封土に含んだ盛土の円墳と観察できたので、本稿では積石塚古墳から除外した。

### (2) 分 布

積石塚古墳は、地理的条件から10のグループに分割できる。ただし、さらに細分できるグループもあり得る。

#### A. 鶴の部古墳グループ

讃岐における積石塚古墳の東限に位置する前方部盛土の前方後円墳鶴の部古墳（図版27-1、第20図A 1）一基で構成される。鶴の部古墳は、当時、島あるいは陸繫島と考えられる小丘南端に立地する。津田湾沿岸の前中期古墳の一基で、唯一の積石塚古墳として、他と異なった特色をみせている。

また、石材に海浜産の大型円礫を用い、風化バイラン土壤の標高10m余の小丘に立地する本古墳は、他の積石塚古墳ともきわだった相違を示す。

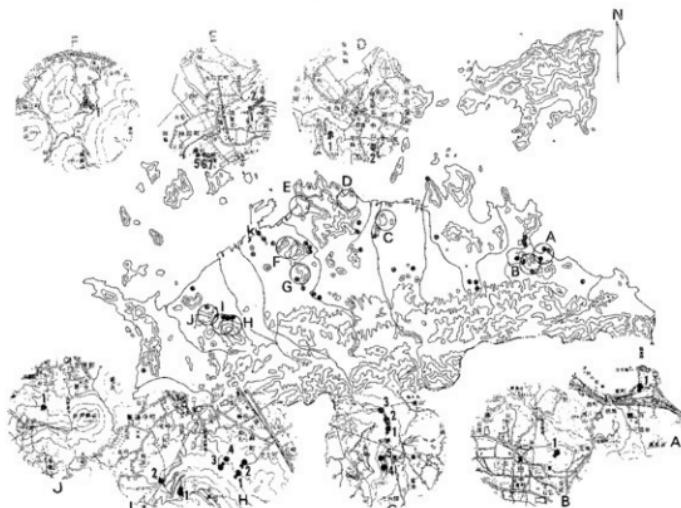
下がり気味の前方部は、その先端近くでバチ状にひらき気味で平坦面には、石材が厚く積まれている。

#### B. 川東積石塚古墳グループ

高松平野から東にのびた平野の最奥の谷間を見おろす丘陵上に位置する、前方部盛土の前方後円墳川東積石塚古墳（図版27-2、第20図B 1）一基からなる。

鶴の部古墳とは近い距離にあるが、低い山並みに連断されて水系も異なるなど、別系統の古墳である。

西方約1.8kmの雨滝山西麓には、古式の前方後円墳奥3号墳や古枝古墳が、南方約1.1kmには四国最大の前方後円墳富田茶臼山古墳が存在する。本古墳は、讃岐の古墳文化を考えるうえで



第20図 積石塚古墳分布図

A 1	鷺の都古墳	7	雌山 3号墳	3	丸山 1号墳
B 1	川東積石塚古墳	F 1	添ヶ松原古墳	4	丸山 2号墳
D 1	横立山積石塚古墳	2	カカリゴロ古墳	I 1	野田院古墳
2	柴塚古墳	G 1	横山船塚 1号墳	2	御足林古墳
E 1	綾ノ田尾古墳	2	横山船塚 2号墳	J 1	大庭塚古墳
2	すべり山 1号墳	3	横山船塚 3号墳	地区上の〔●〕は県内の 主要な前中期古墳(土盛り)	
3	すべり山 2号墳	4	横峰 1号墳	k	聖通寺山古墳
4	すべり山 3号墳	5	横峰 2号墳		
5	雄山 1号墳	H 1	経塚古墳		
6	雄山 2号墳	2	複施塚古墳		

重要な地域で唯一の積石塚古墳である。

古墳からは、西方向に良好な展望がひらけるが、東方や北方は山並みが続き展望はさほどよくなく、東方向の津田湾をはじめ、海は全く見えない。

#### C. 石清尾山グループ

ここでは、石清尾山古墳群に所在する主要な積石塚古墳相互の関係を現在判明する範囲で簡単に述べておく。その分布については「歴史的環境」を参考にされたい。

鶴尾神社 4号墳で検出された埴壺の列石は、石清尾山 9号墳の前方部にもみられ、ともに、  
<sup>(5)</sup>低平でバチ状にひらく(図版26—1付図IV参考3)。

また、猫塚古墳や鏡塚古墳の双方中円墳も方部がバチ状に聞く可能性があるとともに、姫塚古墳、北大塚古墳も、その可能性があるか、あるいは変形であると考えられる。

それに対して、石船塚古墳は納鉢式の前方後円墳で、稲荷山姫塚古墳がそれに近い。

北大塚古墳、稻荷山姫塚古墳の前方部先端には石垣状の積石がみられる。不明確な点も多いが、鶴尾神社4号墳にみられた墳築列石が前方部の発達にともなって構築されるようになっただろうか。なお、姫塚古墳では、後円部にも石垣状の段築がみられる。

主体部については、石船塚古墳の中心主体指抜式石棺以外は、竪穴式石室で、石材や構造に相違はあるが、板石の側壁をもつ石清尾山9号墳や、猫塚古墳の露出した石室が、鶴尾神社4号墳に近いと思われる。

また、河原石は、墳丘の多くにみられる鶴尾神社4号墳、鏡塚古墳、中円部か後円部に多量にみられる猫塚古墳、石清尾山9号墳の例、ごく少量しかみられない經塚古墳、石船塚古墳、稲荷山姫塚古墳、また、その他の古墳のように全くみられない場合と、様々である。

猫塚古墳、姫塚古墳、石船塚古墳からは、円筒埴輪片を出土し、それらの古墳に加えて、北大塚古墳、石清尾山9号墳、稻荷山姫塚古墳と、鶴尾神社4号墳の墳丘からは土師器が出土している。

副葬品としての遺物は、鶴尾神社4号墳以外では、猫塚古墳の多量の遺物と石船塚古墳後円部竪穴式石室の仿製変形獸形鏡と稻荷山3号墳の土師器が知られるのみである。<sup>(16)</sup> <sup>(17)</sup>

なかでも、猫塚古墳の土師器は、鶴尾神社4号墳のそれに後出するものであり、しかも中心主体から出土した可能性がある。<sup>(18)</sup> 事実ならば、双方中円墳という特異な墳形から、群中最古の古墳とされていた猫塚古墳より、鶴尾神社4号墳はさかのぼる時期に築造されたといえる。一方の双方中円墳の鏡塚古墳も、石船塚、北大塚の両古墳より、立地等から先行する古墳に考えられる。また、石清尾山9号墳は立地、規模を除けば鶴尾神社4号墳ときわめて類似した前方後円墳で、築造時期を接近させてよいであろう。

鶴尾神社4号墳を初源とする立場にたてば、猫塚古墳、鏡塚古墳、石清尾山9号墳が、それに近い時期に築造された古墳と考えられ。稻荷山姫塚古墳、北大塚古墳、姫塚古墳、石船塚古墳などが、前方部の形態、主体部、河原石、出土品などの諸点から後出するものと考えられる。

#### D. 生島湾グループ

高松平野の西、生島湾沿岸および住吉川流域を望んで立地する。横立山経塚古墳（図版28-1、第20図D 1、付図IV参考2）と原経塚古墳（第20図D 2）の二基のグループである。

両古墳は、山の中腹にひろがる台地の縁辺に住吉川をはさみ対して立地する。

横立山経塚古墳は、前方部盛土の前方後円墳で、東西を主軸とする竪穴式石室が開口している。石室は、後円部中央に位置し全長5.05mの特送りを有した構造である。山側に向かた前方部は荒廃し、その形状は明らかにできない。<sup>(19)</sup>

後円部からは円筒埴輪片（第22図）が検出された。

なお、この古墳は京大報告に讃岐国下笠原村中山経塚として紹介されている。

原経塚古墳は、墳形が損なわれ石積みの方形墳がみられるにすぎない。

#### E. すべり山・雌山グループ

すべり山の4基と雌山の3基、あわせて7基が属するグループである。互いに距離はあるが、

ともに、讃岐国府の津だった坂出市大屋富町を見下ろし、讃岐に少ない方墳を採用するなどから、則一グループとした。

すべり山では、尾根鞍部に経の田尾古墳（第20図E 1）があり、それより北東に登る尾根に

すべり山1号墳（第20図E 2）、2号墳（第20図E 3）、3号墳（第20図E 4）が立地する。

経の田尾古墳は、北東上方のすべり山1号墳に前方部を向けた前方後円墳といわれているが、

すでに失している。

すべり山1号墳は、崩壊著しく、円墳と推測できるにすぎない。

すべり山2号墳は、遺存状態が良く、塊石を石垣状に積みあげた段築が残る方墳である。そうした段築は、石清尾山の姫塚古墳、北大塚古墳、稻荷山姫塚古墳の他は、雌山1号墳等に現れる。主体部は、墳丘深くに小ぶりの堅穴式石室が、尾根に沿って2個並列する。うち北側の第1主体（図版30-1、2）は、側壁を持ち送るが、高さはさほどでない。鉄劍一口が出

土している。

すべり山3号墳は、半ば崩壊しているものの、方墳の可能性が強い。墳丘の南に片寄って、東西に主軸をもつ小型の堅穴式石室（図版30-3）がある。

雌山古墳群は、標高164m余、東西にのびた雌山山頂に所在する。最高所に位置するのが、雌山1号墳（第20図E 5）である。整然とした方墳で、中央やや北よりに、盗掘を受けた堅穴式石室（図版30-4）が露出している。石室は、分厚い平石を規則正しく積みあげた壁をもつ。

雌山2号墳（第20図E 6）は、1号墳の東方にやや離れて位置する大型の古墳で、石清尾山の

としては、石清尾山の稻荷山北端古墳に次ぐ規模をもつ。

雌山3号墳（第20図E 7）は、2号墳に隣接した小型の円墳で、盗掘坑には天井石と思われる石材が露出する。

本グループにおいては、前方後円墳が一基で、方墳や大型円墳が圧倒的優位を示す。

#### F. 雄ヶ松・ハカリゴーログループ

サヌカイトの雄地金山から、古代山城として名高い城山にむかってのびた鞍部に、二基の積石による前方後円墳が立地する。

雄ヶ松古墳（第20図F 1、付図N参考1）は、前方部盛土の古墳で、前方部先端をバチ状にひろげ、後円部中央に、主軸に斜行した長大な堅穴式石室をもつ。讃岐における古式古墳の代表例である。ハカリゴーロ古墳（第20図F 2）は、前方部がバチ状にひらく可能性のある前方後円

墳で、荒廃した後円部には竪穴式石室（図版29-1, 2, 第21図）がみられる。石室の詳細については「ハカリゴロ古墳の石室」を参考。

#### G. 横山グループ

城山の南、低い山並のなかでひときわ高く、ほぼ南北に背後が走る山がある。これを横山と呼び、5基の積石塚古墳が知られている。本稿では「綾歌町史」<sup>98</sup>に従って、北の3基を横山経塚古墳群、南の2基を横峰古墳群とする。

横山経塚1号墳（第20図G 1）は前方後方墳ともいわれるが、後円（方）部が崩壊しており、現状での断定はむずかしい。

横山経塚2号墳（第20図G 2）は、1号墳の北に隣接した前方後円墳で、稜線上の一つの頂部に後円部をのせ、前方部は、1号墳同様南を向く。墳丘の規模は広大で、石清尾山の大型積石塚古墳と同じような迫力をもつ。1号墳とともに、本グループの中心的な存在である。

横山経塚3号墳（第20図G 3）は、2号墳よりさらに北にやや離れて所在する円墳である。

横峰2号墳（第20図G 4）<sup>99</sup>は、横山1号墳の南約2kmの横山山塊最高所に位置する。墳形は損なわれ、累々とした石の堆積と、幾つもの凹地がみられる。その凹地の一つに、全長0.86mの小型の竪穴式石室（図版30-5）が遺存しているので、古墳と認められる。石室は極めて小規模なもので、中心主体とは考えられない。なお、後述する彷彿五獸鏡は木古墳出土と伝えられる。

横峰1号墳（第20図G 5）<sup>100</sup>は、2号墳の南に位置する円墳で、低く扁平な墳丘をもつ。

本グループの中心となる横山経塚1号墳、2号墳の存在理由として、西川宏氏は、「広大な水田に供給される用水の源にある山に司祭としての首長が墳墓を築きうる」としている。

#### H. 大麻山東麓グループ

丸亀平野の西方、大麻山から東に派生した尾根の2つに、4基の積石塚古墳が所在する。

そのうち、南の尾根上方に位置する経塚古墳（第20図H 1）の後円部は大規模に積まれ、その感覚は横山経塚2号墳と同様である。ただし、山頂方向にむけた前方部は、地形の関係からみてもともと高く積まれたものではないであろう。

経塚古墳の下方に立地するのが、梶貨塚古墳（第20図H 2）<sup>101</sup>で、やはり前方部を山頂方向にむける。後円部中央に盗掘坑がみられ、南側は果樹園とその水路によって破壊されている。

梶貨塚古墳は、石清尾山古墳群を除いて墳丘に河原石がみられた唯一の例である。

経塚古墳、梶貨塚古墳から北側2つめの尾根の先端に隣接して立地するのが、丸山1号墳（第20図H 3）、2号墳（第20図H 4）である。両古墳とも、近くの砂防ダム工事の用材の採石地とされたらしく、石材は、他の積石塚古墳ほど顕著に認められない。

丸山1号墳は、盛土の前方部を平野にむけた前方後円墳で、風化バイラン土の地山を整形あるいは盛土して前方部と後円部の中心部を造り出す。さらに、後円部はその側面や上面に石材

を積み上げ積石塚としている。後円部に、東西に主軸をとると思われる竪穴式石室の痕跡が二か所並列する。

丸山2号墳は、1号墳より下った個所に立地し、竪穴式石室の掘り方が並列する。2号墳の墓き方は基本的には1号墳と同じだが、盛土により多くの塊石を含む。

丸山古墳群は土盛り塙を築造しやすい条件下で、なおも積石塚古墳を築いた例である。経塚古墳、楓賀塚古墳と埴丘造営の手法の違いから別系譜とも考えられるが、近距離に立地するので同一群とした。また、三基の前方後円墳は、バチ状に前方部がひろがる可能性がある。

#### 1. 野田院グループ

のなべいん  
前方部盛土の前方後円墳野田院古墳（第20図I 1）と滅失した円墳御忌林古墳（第20図I 2）  
が属する。野田院古墳は、大麻山の北にはり出したテーブル状地形の縁辺に立地する。地山カットの前方部をバチ状にひろげ、持送りの長大な竪穴式石室をもつ。標高405m、比高360mの前方部をバチ状にひろげ、持送りの長大な竪穴式石室をもつ。標高405m、比高360m

トの前方部をバチ状にひろげ、持送りの長大な竪穴式石室をもつ。標高405m、比高360m  
トの前方部をバチ状にひろげ、持送りの長大な竪穴式石室をもつ。標高405m、比高360m  
方後円墳が相次いで築かれている。

#### J. 大庭経塚古墳グループ

火上山の北、台地状を呈する山腹に立地する大庭経塚古墳（第20図J 1）で構成される。前方部盛土の前方後円墳とされるが、現状では確認がむずかしい。開口した竪穴式石室（図版29-3、4）は、規模、構造とともにハカリゴーロ古墳のそれに類似する。なお、本古墳が畿内における積石塚古墳の西限となる。壺、鉄劍の出土を伝えている。

#### (3) 用 材

積石塚古墳の墳丘に使用された石材は、海浜に産する大型円礫を積んだ鵠の部古墳を除いて、畿内が多くみられる安山岩の塊石である。古墳個々では、同じような大きさの石材が使用される傾向にあるが、一般的には40cm前後の大きさで、1mを越える大型の塊石は、ごく稀にしかみられない。また、塊石を、細かく碎いたバラス状の石材も使われている。

安山岩が、目的をもって選ばれたのか、単なる自然条件の結果なのかは不明である。

安山岩が、目的をもって選ばれたのか、単なる自然条件の結果なのかは不明である。  
また、墳丘を構成する安山岩の塊石に混って、経塚古墳、楓賀塚古墳、川東積石塚古墳で花崗岩が、ハカリゴーロ古墳ではサヌカイトが、それぞれ数石みられた。墳丘に10cmに満たない河原石が積石の間にみられる古墳もある。

その他、北大塚古墳や横立山経塚古墳のように、積石の間に土砂が介在する場合や、総計7基の前方部盛土の前方後円墳など、土砂を用いた例もある。

#### (4) 占 地

踏査中に注意をひいたのは、大規模な露頭の存在で、古墳の近傍にみられる場合とそうでない場合がある。仮に、前者を第1タイプの古墳、後者を第2タイプの古墳とすると、グループ

を単位とした分割が可能である。

すなわち、第1タイプは、石清尾山グループ、すべり山・離山グループ、横山グループで、残りが第2タイプに属する。

第1タイプの周辺にみられる露頭は、安山岩のもので、その周囲には安山岩の転石が現在も多量にみられ、積石塚古墳築造にあたっては、用材の獲得について有利な条件下にある。逆に土盛り墳築造には適さないといえよう。

第2タイプのうち、川東積石塚古墳で、小露頭が確認できたが、それは第1タイプの露頭に比べて貧弱で、第1タイプの露頭と同様に扱うべきではない。一般に、第2タイプの古墳の立地する周辺では、塊石を含んだ層が発達しており、石材を得るのに問題はないようである。しかし、7基の前方部盛土の前方後円墳全てが、このタイプに属することからして、土盛り墳を築造することは、さして困難ではないとも考えられる。

さらに鶴の部古墳、丸山1号墳、2号墳は風化バイラン土層に占地した積石塚古墳で、使用された石材は、明らかに運ばれたものである。土盛り墳を築ける条件ながら、積石塚古墳をあえて築造しており、古墳が積石であることに意義があったのであろうか。

概して、第1タイプは、山頂やそれに続く急峻な尾根に築かれ、第2タイプは、山腹にはり出した台地上の地形の縁辺や山麓に発達した緩やかな尾根のつけ根あたりに占地することが多い。また、第2タイプは、大麻山東麓グループを例外として、単独もしくは2基と最少限の基数でまとまる傾向にある。さらに第2タイプに属する古墳13基のうち、10基が前方後円墳であり、前方後円墳の数が圧倒的に多い。それに対して第1タイプでは、規模こそ見劣りがするものの、円墳、方墳が多く、石清尾山グループ、すべり山・離山グループでは、全体の50%以上を占めるように、前方後円墳の基数が多い。特に石清尾山では小円墳が30基余存在したと考えられ、他の地域にはない特色である。

#### (5) 比高差

積石塚古墳は、高所に立地すると既に指摘されている。特に野田院古墳の占地は、標高405m、比高360mとそこぶる特異ではあるが、それにせまる数値をもって立地する積石塚古墳はなく、低地に立地して特異性を示す鶴の部古墳とともに例外的な存在といえる。従って、積石塚古墳は、100m～200mの比高差に集中する。確かに土盛り墳より、少しばかり高所に立地する傾向があるようである。

#### (6) 海との関連

積石塚古墳を海上交通との関連で説明しようとするとき、それらが海をのぞんで立地することが理由とされてきた。鶴の部古墳は、明らかに海に关心を持つ集団の所産であろう。しかし、津田浦をめぐる他の土盛り墳も同じ性格を有する古墳である。また、屋島長崎鼻古墳の海に開

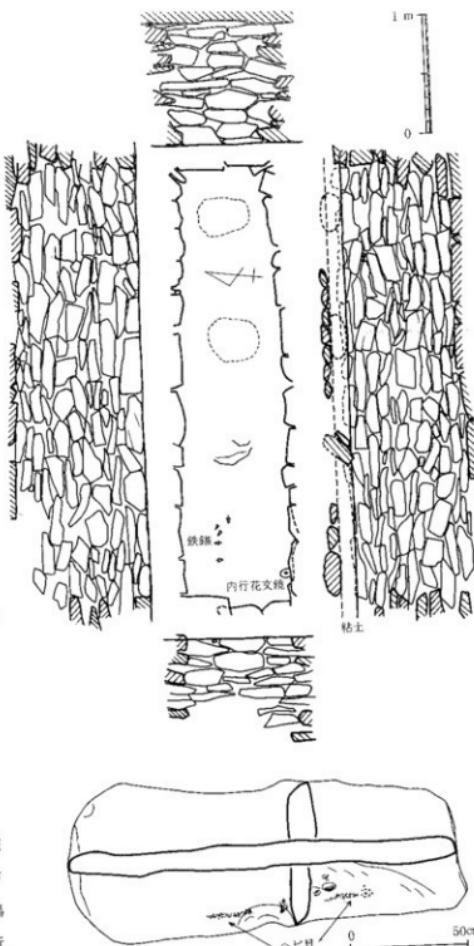
まれた立地は、海上交通あるいは漁勝にかかわった首長の奥津城に違いない。田尾茶臼山古墳（坂出市）や鶴脛山古墳（多度津町）も、海を意識した首長墓であろう。これらは、いずれも土盛り墳である。

積石塚古墳で海にのぞんで立地する例は、鶴の部古墳をはじめ、石浦山の北に立地する諸古墳や生島湾グループ、すべり山・雌山グループなどがあげられる。反面、川東積石塚古墳や丹田古墳のように海をのぞめず、横山グループや善通寺の諸グループそして鶴尾神社4号墳では、海を意識したとは思えない立地である。

従って、積石塚古墳においては、海との関係を有する例と有しない例があり、これは通常の土盛り墳と何ら変わりない。

#### (7) 前方後円墳

積石塚古墳で前方後円墳は22基で、その多くが前方部をバチ状にひろげる。鶴の部古墳は、前方部先端近くで急にひろがる可能性があり、翁ヶ松古墳は、中ほ



第21図 ハカナゴロ古墳の石室略図(川畠迪氏原図)

どでひろがり、鶴尾神社4号墳は、大きなバチ状部をもつ。（付図IV）このような形態の墓が、時間関係を示すものであろうか。

前方部盛土の前方後円墳について、前方部の平道面に葺石的に石材で覆った例が、鶴の部、川東積石塚、爺ヶ松等の各古墳でみられる。鶴の部古墳では、地山カットの前方部を厚く覆い積石による前方部とそん色はみられない。積石と葺石との関連で、今後検討すべき問題である。

次に、積石の前方後円墳から前方部盛土墳、さらに上盛り前方後円墳へ移行するという国式は成立しない。例えば、前方部盛土の爺ヶ松古墳の石室と、積石によるハカリゴーロ古墳の石室は後者が後出すると考えられる。

#### (8) 河原石

橋築遺跡などの調査で注目されたのは、墳丘上にみられた白礫である。<sup>39</sup>鶴尾神社4号墳でみられた円礫は、他に猫塚古墳、姫塚古墳、石船塚古墳、鏡塚古墳、稀荷山姫塚古墳や石清尾山9号墳の石清尾山の諸古墳と椀賀塚古墳で確認できた。

石清尾山古墳群以外では、椀賀塚古墳のみで、悪条件下の踏査であることを考慮すれば、今後、事例は増加することも考えられるが、大勢として、円礫が存在する例と、しない例があるようである。そして、円礫の存在が石清尾山古墳群の特色となるかも知れない。

#### (9) 積石塚古墳の分布について

謙岐の積石塚古墳の多くは、前期ないしは中期の所産と考えられ、分布の中心は、規模基数などからみて、石清尾山古墳群に求めるのが妥当であろう。また、石清尾山古墳群においては、連續的に首長墓として積石塚古墳が採用され続けるのに対し、他の地域においては、単発的に出現する。

しかも、各地域の古相を示す古墳が積石塚古墳である傾向がある。

例えば、野田院古墳の所在する麓には、多くの前方後円墳があるが、それより先行する古墳は見あたらない。他の大窪経塚、大麻山東麓、横山、爺ヶ松・ハカリゴーロ、すべり山・雌山生島湾の諸グループも、そうした可能性がある。

これらの集団は、石清尾山グループの影響を受けながら、初期の古墳を積石塚古墳として築いたのであろうか。

石清尾山古墳群や、そのなかでも古式な鶴尾神社4号墳の持つ意味は重要である。（藤井）

#### (10) ハカリゴーロ古墳の石室

前方後円の積石塚ハカリゴーロ古墳の石室(第21図・図版29-1, 2)は、後円部中央よりやや前寄りで、墳頂から0.9mの深さに主軸に斜行し、ほぼ東西を長軸として所在する堅穴石室である。長さ3.6m、幅は西小口で0.9m、東小口で0.7mと狭まった長方形で、深さ1mである。

石室の底は、角礫の積石上に径15cm内外の割平石を敷きならし、その上に黄褐色粘質の山土を約10cm程度敷き固めて床面をつくっている。この面と同じ高さに、諸台と考えられる大形の角礫を東寄りに1m間隔で3箇が置かれており、副葬品としての鏡と鉄錠は西小口に寄って出土した。

側壁は平らな安山岩角礫を小口積みに10段前後、不規則な算木組に積上げているが、割平石も交っていて、石室構築のために平らな角礫を選び、その不足を割平石で補ったものであろう。壁面に持送りではなく直立し、長壁面と小口壁面の関係は、石材を上下に組合せている角ばった長方形となっているが、東面の一部に両壁にまたがって隅丸状となるものが数個認められる。

天井は長さ1.5m、幅0.6m、厚さ10~15cm程度の平石8枚（うち1枚は花崗岩他は安山岩）をつき合せに架けているが、西端の最も大きな天井石の内面には、ヘビ貝が附着しており、その他7枚の天井石も永年の流水などによる自然の磨研が認められ、これらの天井石が海から運ばれてきたと考えられ、ハカリゴーロと海との関係を示唆するものである。（川辺）

#### ⑩ 積石塚古墳の出土遺物

これまでに積石塚から出土し、今回の報告までに管見にふれたものを紹介する。

#### 石船塚古墳

1931・32年における京都大学の調査によって、石船塚古墳・姫塚古墳・横立山経塚古墳から土師器・埴輪が採集され、現在京都大学考古学研究室に保管されている。すでに報告されているが、ここでも改めて紹介する。

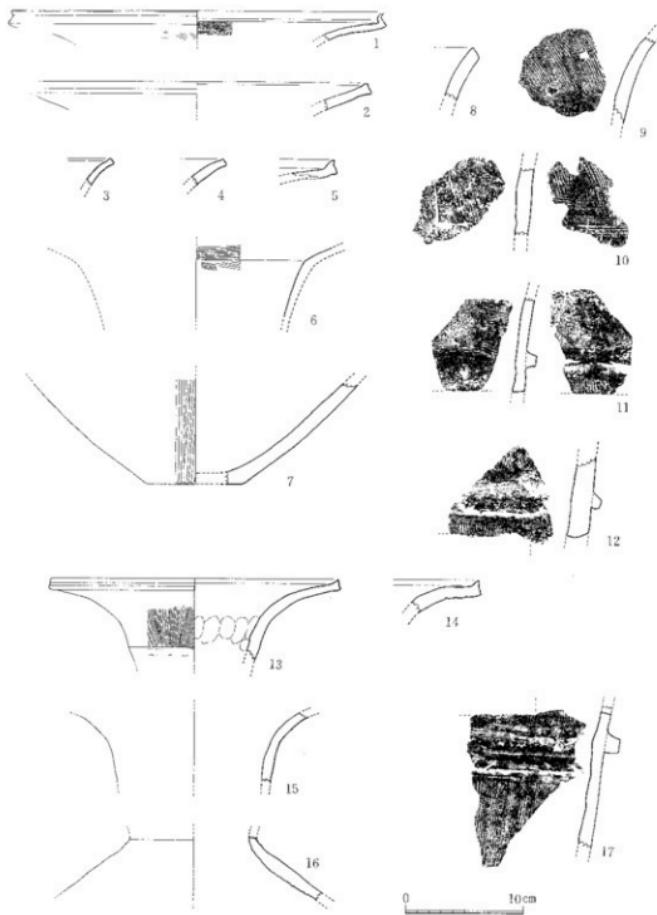
##### 土師器（第22図1~7）

1は壺と思われる口頸部で、復元口径は15.6cmである。口縁部は大きく開いた頸部から短く立ち上り、端部が外反する。口縁部内外面はヨコナデで仕上げ、頸部内面には顕著なヨコハケが認められる。暗黄褐色を呈し、焼成は良く、胎土に砂粒をほとんど含まない。

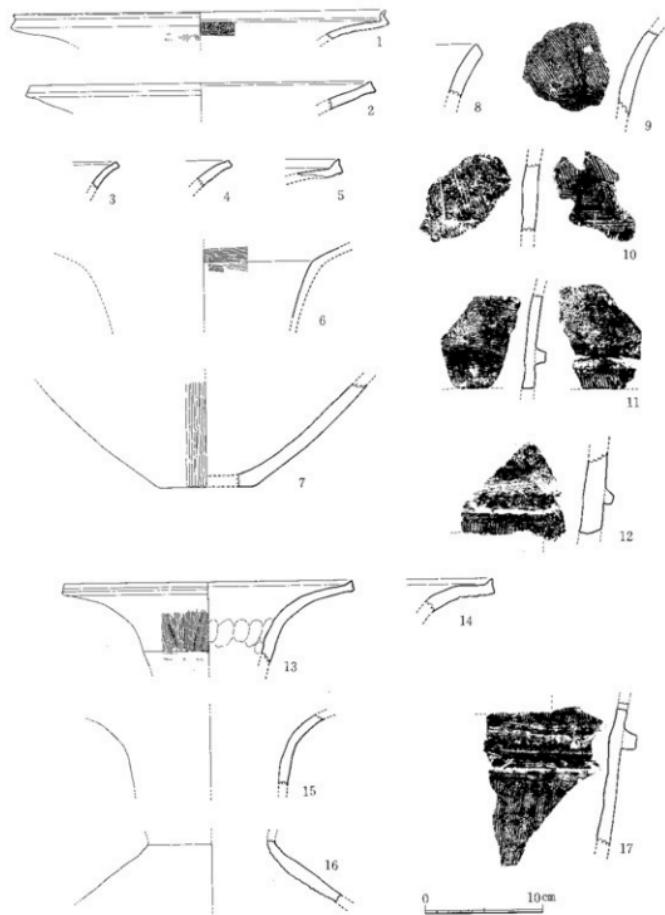
2は復元口径19.6cmの、大きく外反した壺の口縁部である。端部は若干拡張し、内面に凹線はないが、鶴尾神社4号墳の埴丘出土壺の口縁部に類似したつくりである。内外面は暗黄褐色で、焼成は良く、胎土にごく少量の砂粒を含む。内外面ともヨコナデで調整し、外面には月彌り痕が残る。

壺の口縁部には他に、単純に開き、端面に凹線を持つもの（3、4）、凹線を持たないもの、水平ちかくに開いて端部を上方にひき出したもの（5）などがある。4は内外面とも丹塗りであり、外面にはヨコナデの下にタテハケの痕跡を持つ。3・5とも丹塗りの痕跡を持ち、5は外面にタテハケ、内面にヨコハケが認められる。

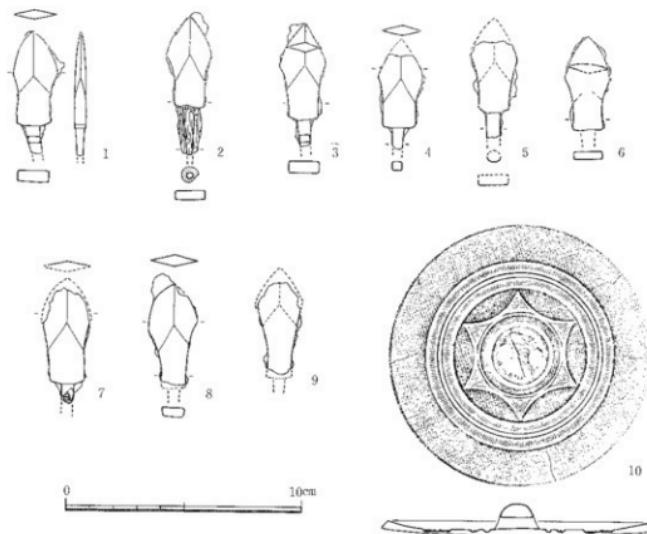
6は朝顔形に大きく開く頸部の破片で、内面には稜を持つ。暗黄褐色で、胎土に1~2mmの砂粒をやや多く含む。



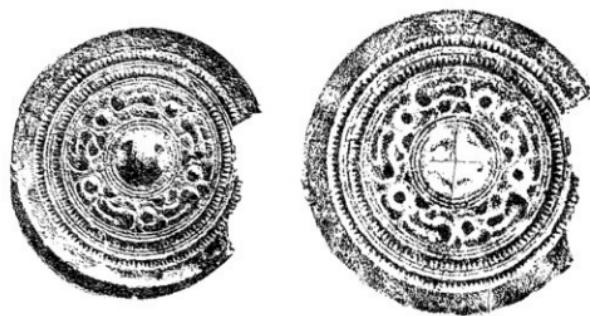
第22図 石船塚古墳・姫塚古墳・横立山経塚古墳出土遺物



第22図 石船塚古墳・姫塚古墳・横立山姫塚古墳出土遺物



第23図 ハカリゴーロ古墳出土物実測図



第24図 伝横峯2号墳出土鏡（右は拓影、約3/4大）

7は平底の底部で、体部及び底部の外面にはヘラミガキを施している。内面にはヘラズリを施しているようであるが、磨滅のためにはっきりしない。

なお、「京都大学文学部博物館考古学資料目録」（以下「京大目録」と略称）によれば土師器には蓋と高环があるとしている。

#### 埴輪（第22図8～12）

暗黄褐色を呈し、胎土には1～2mmの大砂粒を多く含む。外面にはタテハケを施すが、10ではヨコハケで部分的にタテハケが消されている。内面の調整はヨコナデを主体とするが、10にはタテハケ、11の下部にはユビオサエが認められる。11と12は台形状のしっかりしたタガを持ち、方形の透かし孔があけられている。10の外面には丹が塗られている。

#### 姫塚古墳（第22図13～16）

『京大目録』によれば、土師器には蓋と器台を含むとしているが、当該地域におけるこの時期の器台の様相は明らかでないので、一応蓋と考えておく。

13～15は朝顔形に大きく聞く壺の口頸部で、口縁端部は上方にひき上げている。13は復元口径24.8cmを計り、頸部の外面にはタテハケ、内面にはユビオサエが施されている。暗黄褐色～暗赤褐色で、胎土には1～2mmの大砂粒をやや多く含む。外面は丹塗りである。14の下面には三重の圓線が描かれている。

16はあまり張らない肩部であろうと思われる。外面は丹塗りで、ヨコナデ・ナデで器面を調整している。内面は磨滅が著しい。

#### 横立山経塚古墳（第22図17）

円筒埴輪体部の破片で、方形の透かしと、高さ1.2cmの台形のタガをもつ。外面には粗いタテハケが施される。内面はナデによる調整と思われるが、磨滅のためにはっきりしない。外面は焼成が良く、堅緻である。

#### ハカリゴーロ古墳

石室開口直後、川畑道氏によって鉄鎌と内行花文鏡が採集され、現在坂出市立郷土資料館に所蔵されている。

#### 鉄鎌（第23図1～9・図版31～2）

石室西端付近の床面から11点出土したが、そのうち比較的保存の良い9点を図化した。いずれも定角式に属する。身部は中央部が幅広となって、上半部は外縁が刃部をなしつつ、外膨らみの三角形状に狭まって鋒に至る。両面に鏽をもち、横断面は菱形をなすが、6のみは鏽を片面にしか持たないようである。身部下半は断面が厚さ4～5mmの長方形をなす。身部の長さ約4cm、中央部の幅は2cm前後であるが、下端部の幅は一定せず、1～1.5cmを計る。関部は直角ぎみにおさまる。2には、先端を欠失しながらも、1.9mほどの茎が残存している。茎は元

來あまり長くなく、ほぼ2.5cmを越えることはないであろう。2の茎には直径1cmほどの矢柄の痕跡が残っている。

#### 内行花文鏡（第23図10、図版31-1）

石室西端近くの南壁に立てかけられた状態で発見された。完形で、直径11.55cm、面の反り約2.5mm、重さ238.4gの、白銅質の仿製鏡である。鉢は円座鏡で、内区は内側から、幅広の凸帯一凸線—6花文—櫛齒文—二重の凸線—櫛齒文とつづき、外区に至る。花文間には三重線で外向きの山形文を描くが、外側の山形文は内区凸線を底込とし、その中の2個の山形文は底込を共有する。二重の櫛齒文はわずかに斜行し、幅広の外区の断面は、上面がわずかに凹む。文様はシャープで、鏡縁や鉢孔に磨滅はみられない。

なお、花文間に珠文を用い、複線の外向山形文を配した内行花文鏡は、津田町龍王山古墳と綾歌町快天山古墳第2号石棺から出土しているが、文様の細部はそれぞれ異っている。<sup>註1</sup>

#### 横峰2号墳（第24図）

坂出市川津町春日神社宮司の土屋氏が所蔵し、綾歌町富熊八幡宮ノ前古墳出土といわれていたものであるが、川畠道氏の追跡調査によれば、綾歌町と綾南町の境にある横峰2号墳からの出土と考えられるという。鏡は現在、所在不明となっているが、川畠氏によって写真、拓本がとられている。

鏡は仿製五獸鏡で、外区から外側の櫛齒文帯の一部が欠失している。文様は、鉢の外側に3条の凸線をめぐらし、その外側に5乳と便化した5個の獸形を配したのち、2条の凸線、櫛齒文、2条の凸線、銀齒文と続いて幅1cmほどの外区に至る。拓本での直径は12.9cmである。

（渡部）

（註）

1. 梅原末治「瀬戸高松石清尾山石塚の研究」京都帝国大学文学部考古学研究報告第十二冊 1933  
矢原富幸「普通寺市の中代文化」普通寺市教育委員会 1973
2. 松本豊胤「横石塚の地図相—四国地方1考古学ジャーナル180」ニューサイエンス社 1980
3. 肴井常太郎「瀬戸高松郡志」香川県教育会香川郡部会 1944. には、高松沖の女木・男木の西島頂上に各々一基の横石塚が所在する、とあるが実態は不明。
4. 香川県史蹟名勝天然紀念物調査会「史蹟名勝天然紀念物調査報告第三—第二石清尾山大古墳群」1928には、上笠居村、津田町に横石塚古墳群が所在する、とあるが実態は不明。
5. 川畠道氏によれば、他に横山に1基の横石塚古墳が所在し、板出市加茂町東山ゴローに横石塚古墳の可能性がある堅穴式石室がみられた。
6. 六草惠一「瀬戸高松石清尾山石塚をめぐる4、5世紀頃の墓占墳の分布とその解釈」『香川県文化財協会報』特別号7. 1965
7. 「石清尾山塚古墳群調査報告」高松市教育委員会 1973
8. 註5に同じ
9. 梅原末治「瀬戸高松石清尾山石塚の研究」京都帝国大学文学部考古学研究報告第十二冊 1933  
註7に同じ

9. 寒川知治「横立山蛭塚古墳、香川県埋蔵文化財調査年報、昭和54年度」香川県教育委員会 1980
10. 松浦正一「下笠忌村史」下笠忌村史編集委員会1956では、「5m余の墳穴式石室が存在したと伝えられる。」としている。
11. 福家愁斎「香川県通史・古代中世近世編」上田書店 1965
12. 川畠達氏によれば、前方部は単なる地山とも考えられ、前方後円墳でない可能性もある。
13. 渡部明夫「逝ヶ谷古墳調査概報」香川県教育委員会 1975
14. 「綾歌町史」綾歌町史編集委員会 1976
15. 上記文献では前方後円墳とされている。
16. "
17. 西川宏「前半期の古墳文化―讃岐と出雲を中心に―」『古代の日本4 中國・四國・近畿』上田正昭編、角川書店1970、(横山経塚1号墳、2号墳を、かねつき堂1号墳、2号墳としている)
18. 矢原高幸「普通寺市の古代文化」普通寺市役所1973では、本稿と横井塚古墳と経塚古墳の名が混である。  
錯覚のさい、道をお教しいただいた地元の方々全てが、本稿どおりの名を呼んでおられた。
19. 註18では、堅穴式石室の存在を指摘しているが、現状では確認できなかった。なお、土師器が出土したらしい。
20. 註18に同じ  
松本敏三「野田院古墳で想う」、「教育香川」香川県教育委員会 1975
21. 現在復元省み
22. 註18では、前方部は約50cmばかり上盛し、表面を二枚重ね程度の石で覆っているとある。
23. 「石清水尾山塊古墳群調査報告」高松市教育委員会
24. 註9に同じ
25. 東より、鶴の都古墳、川東横石塚古墳、横立山経塚古墳、逝ヶ谷古墳、丸山1号墳、野田院古墳、大宮経塚古墳
26. 露浩一「丹波古墳調査報告」同志社大学文学部考古学調査報告第三編 1971
27. 高松茶臼山古墳、寒川町古林古墳、最近調査された丸龜市吉岡神社古墳、長尾町丸井古墳も、前方部がバチ字形にひらく古墳で、そうした古墳が讃岐には多いと思われる。
28. 近藤義郎「横峯の古墳文化」『香川県の歴史と風土・歴史編』創上社 1980
29. 渡部明夫「讃岐の古墳文化」『香川県の歴史と風土・歴史編』創上社 1982
30. 註7に同じ
31. 京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古学資料目録』2 1968
32. 渡部明夫「龍王山古墳調査概報」『香川県埋蔵文化財調査報告』昭和51年度 1977
33. 和田正夫、松浦正一「快天山古墳発掘調査報告」『香川県史蹟名勝天然記念物調査報告』15 1961

## 積石塚古墳集成(Ⅰ) (前方後円墳編)

(1-1)

No	補圖番号	名 称	所 在 地	標 高 (±) σ	比 高 (±) σ	立 地
1	第12図1	鶴尾神社4号墳	高松市西春日町	114	94	くだる尾根先端
2	第12図6	猫 塚 古 墳 (双方中円墳)	〃 糸町ほか	200	190	尾根頂部
3	第12図7	姫 塚 古 墳	〃 峰山町ほか	204	184	〃
4	第12図8	小 塚 古 墳	〃 峰山町ほか	195	175	〃
5	第12図9	石 鋸 塚 古 墳	〃 峰山町ほか	190	185	尾根
6	第12図10	鏡 塚 古 墳 (双方中円墳)	〃 峰山町ほか	203	196	尾根頂部
7	第12図12	北大 塚 古 墳	〃 峰山町ほか	195	190	尾根先端
8	第12図13	北大 塚西古墳	〃 峰山町ほか	195	190	〃
9	第12図14	石清尾山9号墳	〃 峰山町ほか	185	180	台地稜尾根崖上
10	第12図23	福荷山1号墳	〃 宝町ほか	165	160	尾根
11	第12図25	福荷山姫塚古墳	〃 宝町ほか	165	160	尾根鞍部
12	第20図A1	鶴 の 部 古 墳	大川郡津田町鶴羽	15	—	小丘上
13	第20図B1	川東積石塚古墳	〃 大川町富田中	125	85	丘陵頂上
14	第20図D1	横立山経塚古墳	高松市生島町423-62	127	122	台地縁辺
15	第20図E1	経ノ川尾古墳	坂出市青海町ほか	118	113	尾根鞍部
16	第20図F1	爺 ヶ 松 古 墳	坂出市西庄町八十八	93	88	緩尾根
17	第20図F2	ハカリゴーロ古墳	〃 西庄町八十八	125	120	台地縁辺
18	第20図G1	横山経塚1号墳	〃 府中町横山	226	180	尾根
19	第20図G2	横山経塚2号墳	〃 府中町横山	210	165	尾根頂部
20	第20図H1	経 塚 古 墳	善通寺市大麻町	220	175	尾根先端
21	第20図H2	楠 貨 塚 古 墳	〃 大麻町	175	130	尾根
22	第20図H3	丸 山 1 号 墳	〃 大麻町	215	170	尾根先端
23	第20図I1	野 田 院 古 墳	〃 善通寺町	405	360	台地縁辺
24	第20図J1	大 島 経 塚 古 墳	〃 吉原町三井之江	210	190	〃

## (I-2)

No.	填			全長	後円部		前方部			
	使用石材	段	聚		径	高さ	長さ	くびれ幅	先端部幅	先端部高
1	安山岩塊石	乱構み段聚塊列石	北北西	40	18.7~18	4	21.3	7.1	10.6	1.2
2	" " " "	聚石段築?	北東~南西	96	44 (中円部)	5 (後円部) 24.5 27.5	21.3 22 8	7.1 14 15	1.2 1.8 2.4	
3	" " " "	聚石段築(前方部後円部)	西	43	21	3.6	22	8	13.5	2
4	" " " "	聚石段築?(後円部)	北	17	10	1	7	—	5	0.5
5	" " ?	—	北	57	30	5.5	27	12	10	1.8
6	" " ?	—	南~北	70	30 (中円部)	3.6 (後方部)20 (北方部)20	— —	9 9	2 2	
7	" " " "	聚石段築	東	40	19.5	4.5	20.5	4.5	10	3
8	" " " "	—	東	19	9	1.5	10	5	6	—
9	" " " "	埴縫列石	南西	27.4	13.1	1.2	14.3	—	10	0.95
10	" " " "	—	南	32	18	2.5	14	—	—	0.5
11	" " " "	聚石段築	西	49	27	4	22	12	11.5	—
12	海浜產大型円礫	2段築成	南	34.5	18.3	3	16.2	4.4	6	2
13	安山岩塊石	" " " "	南西	36	21	2.5	15	6.6	13	1.5
14	" (湿土砂)	" " " "	南	34以上	22	4	12以上	5.5以上	—	—
15	安山岩塊石か	—	北東	33	21	—	12	—	7	—
16	安山岩塊石	" " " "	北西	49.2	25.4	3	23.8	10.1	推定23	1.1
17	" " " "	—	南西	45	25.7	1	19.3	7	11	0.5
18	" " " "	—	南	36.5	18	2.5	13.5 (18.5)	5	—	1~1.5
19	" " " "	—	南	36	20	3	16	6	10	1.5
20	" " " "	—	南西	42	22	3.5	20	12.5	13.7	2
21	" " " "	—	南西	30.9	17.7	2	12.5	7.5以上	6以上	0.6
22	" " " "	—	北東	43	23	3	20	9.6	18	2.5
23	" " " "	—	北西	47.5	24	3	23.5	7.5	14	2
24	" " " "	東南?	32	16	2.8	16	—	—	—	—

No.	前 方 部		河 岸 石		陪 頭 に つ い て (海 か)	海 と の 関 係 (海 か)	出 土 通 物	
	前 方 部 形 状	前 方 部 的 態	後 内 部	前 方 部			主 体 部 内	墳 丘
1	バチ状		有	有	墳丘内にみられる。	わずかに みえる	祇園方格復原四神鏡 1面、铁器？玉器？	土器
2	バチ状(?)		有		付近にみられる。	みえる	上師器、鍔五面、 小銅劍25本、箇形 銅器3本、石劍1 銅鏡9本、鐵器等	土師器片／ 円筒埴輪片
3	バチ状？		有		付近にみられる。	"		上師器片／ 円筒埴輪片
4	荒 庵				墳丘内にみられる。	"		
5	柄鏡式		有		付近にみられる。	"	後円錐石室から移製 変形猿形鏡1面	土師器片 円筒埴輪片
6	荒 庵		有	有	付近にみられる。	"		
7	バチ状の変形？	やや土砂混入			付近にみられる。	直下は海		土師器片
8	荒 庵				付近にみられる。	"	土師器？	
9	バチ状		有		墳丘内にみられる。	"		上師器片
10	荒 庵				墳丘内にみられる。	みえる		
11	柄鏡式		有		付近にみられる。	"		土師器片
12	先端近くで バチ状？	前方部盛土、石積み が平坦面をおおう			なし (風化バイライン 土層)	海浜に立地		
13	大きくバチ状？	前方部盛土、石積み が平坦面をおおう			墳丘内にみられる。	みえない		
14	バチ状 or 柄鏡式	前方部盛土			なし (付近には安山岩 を含んだ層が発達)	みえる		円筒埴輪片 器財埴輪片
15					付近にみられる。	直下は海	伝経筒	
16	バチ状	前方部盛土、石積み が平坦面をおおう			なし (付近には安山岩 を含んだ層が発達)	"	ガラス小正1、鉄片	
17	バチ状(?)				"	"	内行文支鏡1面 鉄鏡13本	
18		両方部が階段状？			付近にみられる。	速くにみ える？		
19					"	"		
20	バチ状(?)				なし (付近には安山岩 を含んだ層が発達)	速くにみえる		
21	バチ状(?)		有		"	"	伝土師器	
22	バチ状(?)	前方部盛土			なし (風化バイライン 土層)	"		
23	バチ状	前方部盛土、石積み が平坦面をおおう			なし (付近には安山岩 を含んだ層が発達)	"	土師器細片	
24					"	"	鐵劍1、土師器	

No	七 体 部									
	現認される埋葬施設	石室方位	全長	幅	高さ	天井石	特徴	コーナー	石村	床構造
1	堅穴式石室1	東西(西)	4.7	1.01~1.23	1.6以上	なし(?)	あり	上部で わたす	安山岩板石	塊石積を粘 土で覆う
2	堅穴式石室 (石室数については (9,8,5の諸説あり))	東西	3以上	1.1~1.18	1.73以上	なし(?)	あり	"	安山岩板状塊石 安山岩塊石	
3										
4										
5	割竹式石棺1 堅穴式石室2 (前方部) (後田原)	第1主室堅穴式石室 第2主室堅穴式石室 第3主室堅穴式石室 東西南北	2.6 1.78 1.85	0.6~0.76 0.44 0.9	0.4	柱状安山岩 ?	なし	直角	安山岩塊石 安山岩板状石	
6										
7										
8	堅穴式石室1	東西	2.80	0.8	0.65	柱状安山岩	なし			
9	堅穴式石室1	南北	3以上							
10										
11	前方部に 堅穴式石室?									
12										
13										
14	堅穴式石室1	東西(西)	5.05	0.8~1	1.1以上	やや大型な安 山岩(?)	あり	上部で わたす	安山岩板状 塊石	
15	堅穴式石室?									
16	堅穴式石室1	東西(西)	5.7	0.9~1	約1.3	大型な安 山岩	あり	上部で わたす	安山岩板状 塊石	塊石積を粘 土で覆う
17	堅穴式石室1	東西(西)	3.7	0.7~0.9	約1.0	やや大型 な安山岩	ほとん どなし	"	"	
18	伝堅穴式石室			?						
19										
20										
21	伝堅穴式石室									
22	堅穴式石室2	東西 東西	(5,9) (7,5)	(3,4) (2,9)						
23	堅穴式石室1	東西(西)	5.15	0.7~0.9	1.2	やや大型な 柱状安山岩	あり	上部で わたす	安山岩板状 塊石	地山
24	堅穴式石室1 (石室2種(前方部))	東西	3.53	0.8	0.9	大型な安 山岩(?)	ほとん どなし	"	粘土(やや 固む?)	

No.	備考	主要文献
1	昭和57年度調査。	京大報告 市教委報告
2	中央に巨大な壇場跡。近年、双方中内墳(二隅突出墳)でないかとの説がある。	〃 〃
3	墳丘全体に薬石段築がみられる。	〃 〃
4	荒廃が顕著。	〃 〃
5	石棺は鷲ノ山産石で、後円部中央にみられる第2主体は荒廃。	〃 〃
6	墳丘横を山道がとおり変形をうける。中円部に直掘跡。	〃 〃
7	前方部の遺存状況はきわめて良好。	〃 〃
8	北大塚に接するように墳丘が營なまれている。	〃 〃
9	墳丘は全体に七砂を盛入している。本来の横石が失われている可能性大(付註)	〃 〃
10	円墳説や福荷山4号とあわせて双方中内墳とする説など各種あり。	〃 〃
11	前方部段築は6段、後円部は正円でない。	〃 〃
12	前方部はさがり味、前方部先端は地山カット。	さぬきの遺跡
13	地石はやや小さめ、古墳の位置するあたりは露岩がみられるもの。安山岩層はそう著しくなく風化バーラン土層が発達する。	
14	前方部はかなり変形をうける。後述の原経塚古墳と同日に祭礼。	京大報告
15	現在亡失、大型な石室が存在した?数字は川畠通氏の記録による。	
16	1977年調査、讃岐における古式古墳の代表例。	
17	後円部荒廃。石室はやや前方部より上、前方部は低平、横石は青い。	
18	前方後円墳説もあり後円部荒廃。横石のおり壁穴式石室がみられた。前方部は階段状で、どの数値をとるか今後の検討としたい。	讃岐町史 府中村史
19	整然とした墳丘。	〃
20	後円部に直掘跡、前方部は低平、普通寺市の古代文化では梅袋塚の名。	普通寺市の古代文化
21	後円部に大壇場跡、前方部、後円部とも断面によれば地山上に横石。普通寺市の古代文化では経塚の名。	〃
22	石室の数値はその痕跡2個並列。地山カット、整形により墳丘の基礎をつくり出す。	〃
23	石室は復元済、前方部は地山カット、最も高い位置の古墳。	〃
24	現状では前方後円墳と判断できず。	〃

(注) 墓高について石波茂山では10,000分の1。その他では50,000分の1の地図を参考にした。比高については、先述の地図を参考にし、もっとも平均的な高値を求めた(±10m)(±10cm)。

前方部の形状について、実測と思われる例を?(?)、可能性ありと思われる例を?, 著者等で発表された例を無印とした。我案については石室底に積みあがたものを薬石段築と記した。?は複数発表できないものの大手報告で確認したものである。

単位は(m)

積石塚古墳集成(II) (円墳、方墳、墳形不明編) (II-1)

種類	No	済図番号	名 称	所 在 地	標 高 (±)a	比 高 (±)a	立 地
円 墳	1	第12図 2	鶴尾神社 1号墳	高松市西春日町	140	125	下降する尾根
	2	" 3	" 2号墳	"	130	115	"
	3	" 4	" 3号墳	"	115	100	"
	4	" 5	" 5号墳	"	—	—	"
	5	" 15	石清尾山 23号墳	" 宮脇町2丁目	60	55	斜面
	6	" 17	北大塚北方 2号墳	"	130	125	下降する尾根先端
	7	" 16	" 1号墳	"	150	145	下降する尾根
	8	" 18	石清尾山 14号墳	" 西宝町	200	195	尾根
	9	" 19	" 15号墳	"	195	190	尾根
	10	" 20	" 16号墳	"	190	185	尾根
	11	" 21	稻荷山 3号墳	" 宮脇町2丁目ほか	100	95	尾根鞍部
	12	" 22	" 2号墳	"	120	115	下降する尾根
	13	" 24	" 4号墳	" 宝町ほか	165	160	尾根
	14	" 26	" 5号墳	" 宮脇町2丁目ほか	160	155	尾根
	15	" 27	福荷山北端古墳	"	165	150	尾根頂部
方 墳	16	" 28	野山 4号墳	" 西春日町ほか	140	130	下降する尾根
	17	第20図 E 2	すべり山 1号墳	坂出市府中町ほか	150	145	"
	18	" E 6	雄山 2号墳	" 林田町ほか	150	145	山頂近く
	19	" E 7	" 3号墳	"	145	140	山頂近く
	20	" G 3	横山経塚 3号墳	" 府中町ほか	200	155	尾根
	21	" G 4	横峰 1号墳	綾歌郡綾歌町ほか	230	180	尾根
	22	" H 4	丸山 2号墳	普通寺市大麻町	215	170	尾根先端
墳 形 不 明	23	第12図 11	北大塚東古墳	高松市峰山町ほか	195	190	尾根先端
	24	第20図 E 3	すべり山 2号墳	坂出市青海町ほか	160	155	下降する尾根
	25	" E 4	" 3号墳	"	170	165	"
	26	" E 5	雄山 1号墳	" 林田町ほか	164	160	山頂
原 経 塚 古 墳	27	第20図 D 1	原経塚古墳	高松市中山町原	70	50	台地
	28	" G 5	横峰 2号墳	綾歌郡綾歌町ほか	254	204	尾根頂部

## (II-2)

No	使用石材	段 築	長 径	短 径	高 き	河 原 石	露 酒 に つ い て
1	安山岩塊石	若干残存	9	8	1,5		付近にみられる
2	"		13	10	4		"
3	"	若干残存	10		2,5		"
4	"		8	6	1,5		"
5	"		9		2,0		"
6	"		9		0,5		"
7	"		17	10	1,7		"
8	"		5		1,5		"
9	"		7		1,4		"
10	"		6		1,0		"
11	"		9		1,0		"
12	"		15	11	1,5		"
13	"		8		2,0		"
14	"		21	18	2,0~0,2		"
15	"	段築崩壊	28	20	2,5		"
16	"		7	5	1,2		"
17	"		7,5(12,8)	7,4	----		"
18	"	あり?	22,3	20,6	3,5		"
19	"		11,4	11	1		"
20	"		14	12,4	1,5~1		"
21	"		11	10,4	0,5~0,2		"
22	"(土砂)		18,5	17	1,5	バイラン土層	
23	"	礫石段築	(長辺) 10	(短辺) 9	2	付近にみられる	
24	"	礫石段築	12,5	11,5	3~0		"
25	"		12	11	3~2,5		"
26	"	礫石段築	10,1	10	1,3		"
27	"(やや小さめ)					なし(付近には安山岩を含んだ層が発達)	
28	"					付近にみられる	

## (II-3)

No	海との関係	出 土 遺 物		七 庫 部				
		主 体	部 内	墳 丘	現認される埋葬施設	石室方位	全 長	幅
1	みえる				竪穴式石室 1	東 西	1 以上	
2	"							
3	"							
4	みえない？	土師器？			竪穴式石室 1	N-68°-E	2 以上	1
5					竪穴式石室 1		1.78	0.45~0.36
6	直下は海							
7	"							
8	"							
9	"							
10	"							
11	みえる	土師器 (壺・高环等)						
12	"							
13	"							
14	"							
15	直下は海							
16	みえる	土師器細片	竪穴式石室					
17	直下は海							
18	"							
19	"		竪穴式石室？					
20	遠くにみえる？							
21	"							
22	"		竪穴式石室 2	東 西	(6.5) (6)	(3.3) (3.5)		
23	直下は海	第1主体、鉄劍1口						
24	"	第1主体、鉄劍1口	竪穴式石室 2	南西-北東 (第2主体) ×	2.76 1.71以上	0.73~0.7 1		
25	"		竪穴式石室 1	東西(西)	1.5	0.41~0.35		
26	"		竪穴式石室 1	東西(西)	0.61以上	~0.6		
27	みえる		竪穴式石室 1 ?		5 以上			
28	遠くにみえる？	伝彷彿五嶽鏡	竪穴式石室 1	東 西	0.86	0.5~0.45		

No.	主体部					
	高さ	天井石	待通	コーナー	石材	床構造
1					安山岩の小塊石	
2						
3						
4	0.6	不明	ややあり		安山岩の小塊石	
5	約0.3					
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
19		天井石らしき石材				
20						
21						
22						
23						
24	0.8以上	あり	顯著	石材をわなず	偏平塊石 n	赤色木をしく n
25	0.1以上	?			板状安山岩	
26	0.5以上	柱状の天井石	なし	直角	レン瓦状塊石	
27						
28	0.4以上	平らな天井石	なし	直角	偏平塊石	粘土敷?

No	備 考	主 要 文 献
1	鶴尾神社古墳群最高所の古墳。	市教委報告
2	探石のためか一部変形。	〃
3	壇基跡あり。	〃
4	現在亡失、亡失時土師器が多量に出土したらしい。	〃
5	砂摺ひどし。	〃
6	瓶跡をとどめるにすぎない。	〃
7	形はくずれている、前方後円墳の可能性あり。	〃
8	方墳の可能性もあり。	〃
9		〃
10	古墳ではない可能性あり。	〃
11	現在ほとんど亡失。	〃
12	山道により変形をうける。	〃
13	小型の円墳、これと鶴荷山1号墳を加えて双方中円墳とみる説もあり。	〃
14	本墳を中心に鶴荷山北端古墳、鶴荷山姫塚古墳との間に、幾つもの石の集中する箇所あり、本墳は偏平な埴丘をもつ。	〃
15	両方に小突起部をもった双方中円墳の可能性もあり、特に南方がそう観察できる。	市教委報告 京大報告
16	出土土師器は厚さ1cm~0.6cm、外面へら磨、内面へら削~指擦形、赤褐色、焼成。	〃
17	半壇、現状では円墳を示すと思われる。	
18	大型の円墳、越山1号墳とやや離れて立地。	
19	雌山2号墳に隣接。	
20		
21	偏平な埴丘。	
22	基礎は地山整形によって削り出されている。( ) 内数値は掘り方。	善通寺の古代文化
23	北大塚古墳と隣接、前方後円墳と方墳の轉換例は附ノ丸1号、3号墳と同じ。	京大報告 市教委報告
24	きわめて整った方墳。	
25	半壇、方墳の可能性高い／主体部は中心主体部でない？	
26	整った方墳、中心をややはすれて竪穴式石室露呈。	
27	円墳(?)	下笠戸村史
28	周辺に石が多く積まれ、間地が多くみられる。	綾歌町史

(註) 1番に同、12の御忠林古墳(直徑8mの円墳と伝えられる)は亡失しているため詳細が不明なので除いた。

## [VII] 鶴尾神社4号墳をめぐる問題

### (1) 鶴尾神社4号墳出土の鏡について

これまで石清尾山出土と伝えられ、いわゆる伝世鏡とされてきた獸帶方格規矩四神鏡は、鶴尾神社4号墳から欠損部分が出土したことによって、ほぼ完形となった。いわゆる漢中期の鏡とされるこの鏡は、背面の文様が不明瞭で鏡縁が丸味を持ち、古い割れ口に沿って補修孔を持つことを特徴とする。

これについて梅原氏は、文様の不明瞭さは長年月の伝世による手磨れのためであるとし、その根拠として、鏡の鑄造から副葬までが長期にわたること、二つに割れてもなお使用し続けたことを示す補修孔の存在をあげている。<sup>(1)</sup>これに対し原田氏は、文様が不明瞭なのは鑄造時の湯冷えによるものと考え、梅原氏とは全く異なる見解を提起した。<sup>(2)</sup>

このように、この鏡については二つの異なる意見があるが、今回の調査で欠損部分が出土したことにより、鏡の全体を観察することができたので、その結果から、改めてこの問題を考えみたい。

観察結果は以下のとおりである。

1. 鏡縁や、内区から一段高くなった外区の内縁は全体的に角が丸味をもっている。
2. 外区をみると、二重の円圈に挟まれた唐草文や獸形文は比較的シャープである。これに対して、二重の円圈の両側、例えば内区沿いの珠文や獸形文の頭部は不明瞭であり、周縁付近もシャープさに欠ける。これも全体的に認められる。
3. 斜行櫛齒文は全体にシャープである。
4. 銘文のいくつか、例えば「漢・有・善・福・左・備」などの文字は、内側が不明瞭であるが、外側（斜行櫛齒文側）はそれほどでもない。
5. 内区の「T・L・V」は二重の凸線であらわされているが、二重線の内側に比べて、外側の方がより不明瞭となっている。これも全体的に認められる。
6. 内区の乳は四葉座乳であるが、四葉の先端は不明瞭となっているにもかかわらず、乳に接する部分、つまり各葉の間の切込みは明瞭である。
7. 鏡孔の角は丸味をもっている。

以上で明らかなように、文様が不明瞭な部分はブロック状には存在しない。同時に文様が明瞭な部分も、外区中央部分や内区斜行櫛齒文・鏡帶外側のように、鏡をめぐって帯状に存在する。一段高い外区に接した斜行櫛齒文帶が最も磨滅を受けにくい部分であることは明らかであるし、外区の中央部が両端の角やその付近に比べてシャープなのは、やはり磨滅を受けにくい

ためであろう。また、内区文様は一様に不明瞭であるにもかかわらず、「T・L・V」文の二重線の内側、四葉座乳の基部が比較的シャープであることも、この部分のみ鋳造が良かったと考えるより、やはりこの部分が磨滅を受けにくいためにそれが関係するのではないか。

以上のことからすれば、鶴尾神社4号墳の鏡の文様が不明瞭なのは鋳造時の原因ではなく、手磨れないしは研磨による可能性が大きいものと思われる。

しかしながら、古墳出土後の後漢鏡に、鶴尾神社4号墳の鏡のような磨滅を持つものが非常に少ないことは、手磨れを理由にして鏡の伝世を一般化することを困難にする。鶴尾神社4号墳の鏡が手磨れないしは研磨を受けたものであり、例えそれが我国の弥生社会で行われたとしても、そのことを理由にして一般的に鏡の伝世が行われたとする事はできないであろう。

中四国から畿内にかけての地域に、すでに弥生時代に舶載鏡がもたらされていたという証拠はこれまでほとんど認められなかつたが、最近いくつかの例が知られるようになった。

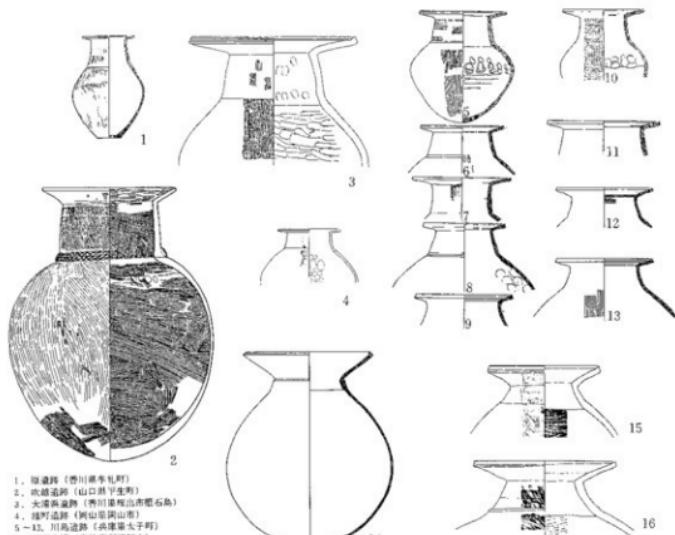
瀬戸内から畿内において、弥生時代であることが明らかな舶載鏡としては、兵庫県大中遺跡の内行花文鏡<sup>(3)</sup>（後期）・和歌山県庵が峯遺跡の鹿鳴文鏡<sup>(4)</sup>（後期）・大阪府瓜破北遺跡の内行花文清白鏡または重圓清白鏡<sup>(5)</sup>（後期）・奈良県長柄の多道細文鏡<sup>(6)</sup>があり、ほかに、高知県高知空港予定地で、中期末～後期の溝状遺構の埋土から出土した方格規矩四神鏡もその可能性が強いものと考えられている。現在のところ、その例は少なく、銅鐸を伴出して性格が異なると思われる奈良県長柄例を除くと、小破片が放棄された状態で検出されているが、そのことがかえって鏡の伝世を裏付ける理由となるかもしれない。

また、大阪府龜井遺跡・巨摩庵寺遺跡では弥生時代後期の土器と共に新・後漢初頭の貨泉<sup>(7)</sup>が出土し、畿内で作られたとみられる銅鐸のあるものが前漢鏡タイプの原料を用いていることなどからみれば、すでに弥生時代に畿内にも後漢鏡が流入し、それらが伝世されたとする梅原・<sup>(8)</sup>小林氏の見解はきわめて現実的な仮説と思われる。いま、細部にまでわたってこれを検討する余裕はないが、鶴尾神社4号墳出土の鏡の観察からみても、中・四国から畿内の弥生社会にも後漢鏡は流入し、あるものは古墳時代まで伝世された可能性は十分にあるものと考えられる。

## （2）出土土器について

鶴尾神社4号墳からは、各種の壺からなる多量の土器を出土した。現在のところ、高松平野ではこの時期の遺跡の調査例がほとんどないため、この地域で土器編年上の細かな位置を決定することはできないが、断片的な資料や、他地域での調査結果からみれば、およその時期を知ることができる。

出土土器のうち、墳丘に立て並べられていたと思われる壺は類例が多い。このタイプの壺は兵庫県川島遺跡<sup>(9)</sup>で最初に確認され、その後、岡山県・香川県でも出土している。器形からみれば、酒井式土器の中にも頸部が類似するものがあり、また、形態的にこれに近いと思われる下開きの頸

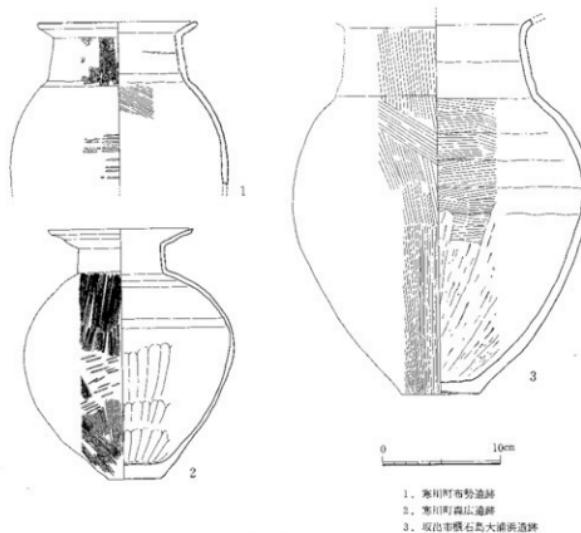


1. 須造跡（香川県佐佐町）  
2. 吹越遺跡（山口県宇部市）  
3. 大瀬遺跡（徳島県阿波市大瀬石島）  
4. 岩出遺跡（徳島県阿波市）  
5～15. 川東遺跡（高松市右近屋山）  
14. 鹿家古墳（高松市右近屋山）  
15, 16. 百間川貝塚遺跡  
(岡山県岡山市)

第25図 関連土器資料（1）

部に強く外反する直線的な口縁部を持つ壺は、山口県吹越遺跡（第25図2）、徳島県萩原墳墓<sup>39</sup>、香川県原遺跡（第25図1）・布勢遺跡（第26図1）・森広遺跡（第26図2）など、中部瀬戸内を中心に出土していることからみて、このタイプの壺は中部瀬戸内の土器であることは疑いない。

第25図3は香川県坂出市大瀬浜遺跡やけやま東麓地区から出土したもので、頭部はやや強く下方に開き、水平ぎみに外反した口縁部の端部内側は肥厚する。この土器はその後の復元作業によって、肩部に最大径を持つ縱長の体部を持つことが明らかとなった。また、接合はできなかったが、胎土、焼成、調整からみて同一個体と思われる底部の破片も付近から出土しており、これによれば、底部は丸底ぎみの平底であることがわかる。体部外面は上部をタテハケで調整するが、下部はタテハケの上にタテのヘラミガキを施す。底部外面は平行のヘラミガキである。内部は、底部から肩部下半までを横ないし斜のヘラケズリ、肩部内側はユビオサエないしユビナデで調整する。



第26図 関連土器資料 (II)

これに類似したものは、岡山県百間川今谷<sup>㉙</sup>遺跡でも出土している。両者とも遺構に伴うものではないが、大浦浜遺跡では布留式土器を含まないとされ、百間川今谷遺跡では土器溜りの伴出土器から、百間川後期Ⅳ<sup>㉚</sup>でも古い段階に比定されている。なお百間川後期Ⅳは、雄町11類と12類の古い段階を含み、オノ町I・II期に相当し、グランド上層の新しい段階と酒津式<sup>㉛</sup>を含む<sup>㉜</sup>とされている。

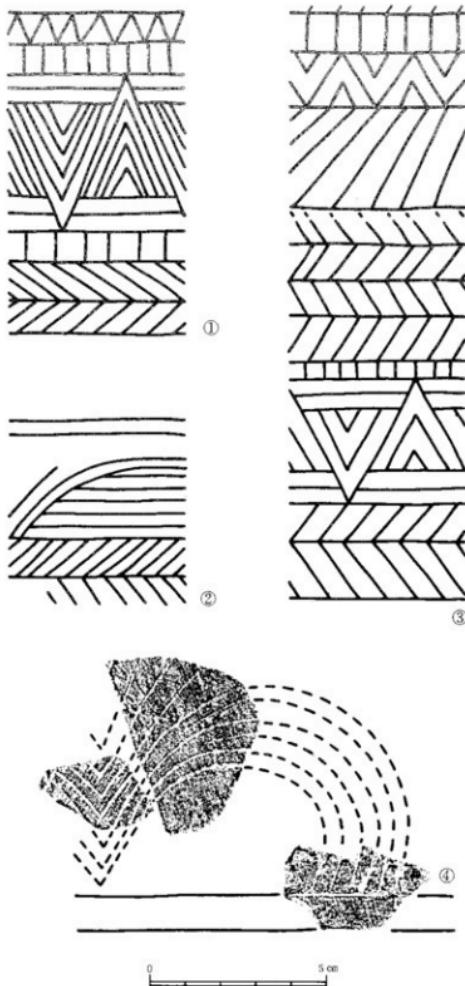
これに対し、兵庫県川島遺跡20溝<sup>㉝</sup>の壺（第25図5～13）は、口縁部・頸部はあまり異ならないが、全体にやや小形化し、5の体部は直径に比べて高さを減じ、底部は丸底となっている。報告では、伴出土器は畿内第V様式から酒津式の新しい段階の特徴を持つものの同一時期であるとしているが、布留式期の指標の一つとされる鉢も出土している。したがって、20溝出土の土器は必ずしも同一時期ではないものと思われるが、B型土器の壺も細分されうるのか、それともどれかの時期に比定されるのかについては明確にしがたい。

また、このタイプの壺と同じ技法を持つ壺は、川島遺跡20溝<sup>㉝</sup>のほか、兵庫県長越遺跡の住居跡7、落込1・大溝<sup>㉞</sup>や、百間川今谷遺跡包含層・奈良県磯向遺跡東田地区南溝（南部）上層、

同中層から出土し、そのうち長越遺跡落込1・大溝及び櫛向遺跡東山地区南溝（南部）上層には型式的に布留式まで下ると思われる土器を含む。したがって、川島遺跡で考えられたように、この種の壺と蓋がセットとなるならば、その下限は布留期にまで下る可能性がないとはいえない。ただ、澤氏は、兵庫・奈良で出土するこの種の土器は、調整や形態から、岡山のものより新しいと考えており、地域ごとの編年作業が必要である。

ところで、鶴尾神社4号墳の壺は、大きさ・部体の形・底部とも百間川今谷遺跡・大浦浜遺跡出土のものに類似しており、地域の差や出土遺跡の性格を無視すれば、岡山地方でいう百間川後期IV、すなわち、ほぼ雄町II類、才の町I・II、酒津式の時期に比定することができよう。

一方、墳掘出土の壺以外の土器をみると、第17図3は屈曲部の上半が垂直に立上って短く終るものであり、



第27図 文様想定復元図

三木町西土居古墳群で発見された弥生後期の豪棺とも類似し、瀬戸内系の土器とみなすことができる。また第17図6は川島遺跡・徳島県森原墳墓に類例がある。その他の土器にも、畿内の影響のもとに成立したと考えなければならない土器は見られない。

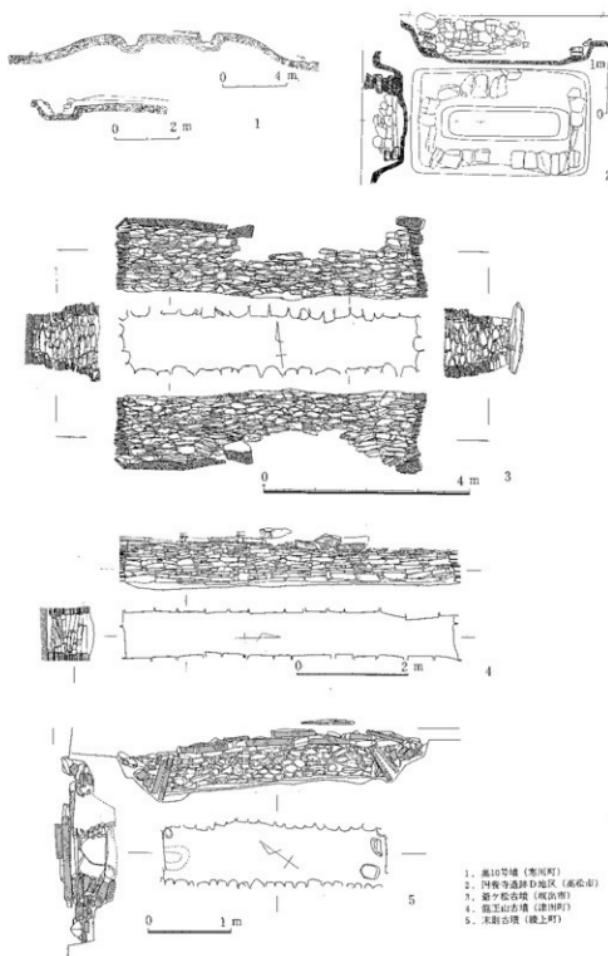
したがって、鶴尾神社4号墳の出土土器はすべて在地の土器で構成されたと考えられるが、そうしたあり方からも、これらが畿内の布留期以前に位置することを物語っていると言えるかも知れない。ただし、現在のところ高松平野での土器編年が進んでいないため、この地域で時期を設定することは困難であるが、ここでは一応上限を百間川後期IV平行期と考えておく。一方下限については在地の土器が冠まで残った可能性を全く否定することはできないが、それでも畿内で最古の古墳の時期とされる布留I式より新しくすることはできないであろう。鶴尾神社4号墳の土器が畿内の布留期を遡るならば、鶴尾神社4号墳は現在のところ確実な前方後円墳として我が国で最も古く位置づけられることになる。

一方、土器に施されたヘラ描文をみると、第27図1は第17図13の頸部外面、2は第18図12の肩部外面の文様である。3は、胎土、焼成、色調、調整を同じくする第17図8と第18図13の綾杉文、第18図13と第18図33の複線複合山形文を組合せて復元したものである。また、4は、第19図51と44、さらにここでは図示しなかった破片を組合せてみた。44などの曲線文の中心部とみられる破片は、出土資料からする限りは51しか見当たらず、また、放射状曲線の終りの部分の可能性のある破片は、これ以外には認められない。

鶴尾神社4号墳にみられるヘラ描文のうち、複合豪華文や綾杉文などは岡山地方の特殊器台、特殊壺などに用いられているが、異なる文様もあり、組合せも異なっている。また、一般に布留式土器にはこのような豊富なヘラ描文を持たず、このことからも鶴尾神社4号墳の土器に布留式土器の影響は認められず、同時に、布留期にまで下らないことを示しているかもしれない。

第25図14は高松市石清尾山猫塚古墳からの出土とされている壺である。鶴尾神社4号墳の壺と比べると、口縁部の傾斜が大きく、頭部は非常に短く、体部は下膨らみの丸底となっている。細部の特徴は別として、短い頭部から直線的に開く口縁部を持つ壺は、酒津式土器に類例があり、したがってこの土器は酒津式土器との関連が考えられている。また、岡山県百間川原尾島遺跡新田サイフォン調査区井戸2などでも、比較的短い下開きの頭部から直線的に外反する口縁部を持つ壺が出土し(第25図15・16)、猫塚古墳の壺との関連が考えられる。ただ、酒津式土器や、百間川原尾島遺跡で伴出した壺はまだ底面を有しており、これからみれば、猫塚古墳の壺の体部はより新しい様相を示し、時期も下るものと思われる。

このように、鶴尾神社4号墳の壺に比べて猫塚古墳の壺はより新しくなり、このことは、猫塚古墳出土とされている副葬品の一部から考えられる時期と一致し、埴輪の出土を伝えることも一致するかもしれない。しかし、これらの副葬品の出土状態が明確でないことや、多数の石



第28図 香川県内の堅穴式石室

1. 高松市古墳（高松町）
2. 四国市古墳D地区（高松市）
3. 鎌ヶ谷古墳（高松市）
4. 駿河山古墳（津田町）
5. 木原古墳（綾上町）

室が時期差を持つことも考えられるので、この土器によって示される時期が必ずしも古墳の築造時期であるとは限らない。これについては、現状では多くの解釈が可能であるが、今後の検討に待つことにしたい。

以上のように、鶴尾神社4号墳出土の土器は、これまで古墳からは出土しないとも考えられていた時期まで遡る可能性が強く、そのことは、我国における古墳の成立・伝播に密接に関わる重要な問題を提起したものと言うことができよう。

### (3) 県内の竪穴式石室について

香川県内には前方後円墳をはじめとした前期古墳が多く、したがって竪穴式石室も多く知られている。<sup>35</sup> 詳細な内容が報告されたものは多くないが、それでも時期や地域によってあるいは積石塚と土盛り塚で若干の変化・相違が認められる。したがって、ここでは積石塚と土盛り塚とに分けて、壁面構造と規模を中心に、既知の竪穴式石室をみてゆくことにする。なお、ここでは例抜式石棺を含めた石室は含まないこととする。

まず、積石塚の竪穴式石室をみると、鶴尾神社4号墳は前述のように、安山岩板石積みで規模が大きいこと、特に高さが高く、側壁は床面から約50~60cmまでをほぼ垂直に積み上げ、コーナーは直角に組合せるが、それから上を持送りとして、コーナーには両壁にまたがる石材を用いることを特徴とする。

香川県内には、側壁の高さが<sup>36</sup> 1.4mを越える竪穴式石室はほかに、猫塚古墳「中円部」に残存する1基があげられる。<sup>37</sup> 猫塚古墳の石室は、破壊が著しいため長さははっきりしないが、幅は1.1~1.18mと広く、高さは1.73m以上もある。側壁には安山岩塊石や分厚い板状安山岩を用いており、この点は鶴尾神社4号墳と異なるが、床面から約50cmまでをほぼ垂直に積上げてコーナーを直角に組み、それ以上を持送りとして、コーナーに隅丸状に配する石材をもつことは一致する。しかも、鶴尾神社4号墳と同じく、大きな天井石は持っていた証拠は認められないものである。

坂出市鶴ヶ松古墳<sup>38</sup> (第28図3) や善通寺市野田院古墳の石室は、分厚い板状安山岩や、一部には塊石ぎみの安山岩を用いるなど、用材からみれば猫塚古墳に類似する。しかし、石室の幅と高さ、特に高さが1.2~1.3mと低くなり、このためか、猫塚古墳ほど明確に側壁下部を垂直に積上げず、床面から持送りする部分も認められる。側壁下部の垂直な石積み部分の不明瞭化、ないしは省略と考えることもできる。なお、石室下部が埋って詳細は明らかでないが、側壁の持送り構造からみて、高松市横立山経塚古墳も同様な構造をもつものと考えられる。

善通寺市大蔵経塚古墳・坂出市ハカリゴーロ古墳の石室は長さが3.5~3.6mと短くなり、幅、高さとも1m以下となって小形化している。同時に、側壁の持送りは少なくなつて、コーナー上部の隅丸構造も顕著でなくなる。石清尾山古墳群において、かつて「切通し上の石塚」とし

て報告された石室も、このタイプに属するものと思われる。

坂出市すべり山2号墳の第1石室は、長さ2.76m、幅0.7~0.75m、現状での高さ約0.8mを計る小形の石室であるが、一方の小口壁の下部には塊石を用い、側壁やコーナー部分の持送り構造も顕著である。また、側壁の持送り構造の詳細は明らかでないが、石清尾山「北西端石塚」の石室もほぼ同規模で、長側壁下部に塊石を用いている。<sup>39</sup>

高松市石清尾山石船塚古墳後円部・前方部、「山裾石塚」・坂出市すべり山2号墳（第2石室）・綾歌町横峰2号墳などでは、板石や塊石を用いた2m以下の石室が発見されている。古墳の中心的な埋葬主体でない場合も多く、石船塚後円部・「山裾石塚」の石室には、一部に箱式石棺の手法が認められる。

以上のはか、特殊なものとして、箱式石棺を竪穴式石室で覆ったものが石清尾山裾跡谷で発見されている。<sup>40</sup>

以上の竪穴式石室を出土遺物からみると、鶴尾神社4号墳出土の壺は酒律式・庄内式に平行する可能性が強く、我国最古式の古墳と考えられる。これに対して、猫塚古墳や大塙経塚古墳出土の壺は丸底化し、新しい傾向が認められる。また、ハカリゴロ古墳・石船塚古墳（後円部石室）・横峰2号墳は、三角縁神獸鏡以外の偽製鏡を出土することから、ほぼ4世紀後半以後に比定できる。猫塚古墳は、偽製三角縁三神三獸獸面鏡のほか、前漢鏡1・後漢鏡3・石訓・筒形銅器・鉄劍・土師器壺などを出土している。出土状態は明らかでないが、複数の石室が確認されているので、これらが數次にわたる副葬品であり、その下限が4世紀半頭であることも考えられる。また、鶴尾神社4号墳・爺ヶ松古墳・野田院古墳からは土師器と思われる土器片が出土しているが、石船塚古墳ではほかに埴輪も出土し、新しい様相が認められる。墳丘をみると、鶴尾神社4号墳、爺ヶ松古墳の前方部は明瞭にバチ状に開き、特に爺ヶ松古墳の墳丘規模が岡山県湯湯場車塚古墳に類似することは注目される。

以上のことからすれば、積石塚の竪穴式石室は、鶴尾神社4号墳のように長大で特に高さが高いものから、短くて幅・高さとも小さいものへと変化する傾向を認めることができる。

しかも、これらの竪穴式石室各々の細かな年代は別にして、石室構造が系譜関係を持つとすれば、上述の年代観からみて、爺ヶ松古墳・野田院古墳の石室は、鶴尾神社4号墳の石室下部の垂直な構築部分の不明瞭化ないしは省略として理解できる。さらに、すべり山2号墳第1石室は、その小形化であろう。一方、ハカリゴロ古墳・大塙経塚古墳の石室は、先行するものが発見されていないが、鶴尾神社4号墳の側壁下部が強調され、上部まで垂直に構築された長大な石室の存在を想定すると、その小形化として把えることができよう。また、長さ2m以下の小石室は、すべり山2号墳第1石室や、ハカリゴロー古墳などのさらに小形化と考えることができる。

以上の積石塚の堅穴式石室をまとめると次のような。

A. 5 mに近い規模で、側壁は高く、下部を垂直に積上げたのち、上部を持送り構造とする。

鶴尾神社4号墳がこれにある。猫塚古墳の石室は、長さ以外はよく一致する。きわめて近い関係にあることが考えられる。

B. 5 m前後の長さで、Aタイプよりむしろ長いが、幅、高さとも小さくする。側壁の持送り構造は顕著であるが、下部の垂直な構築は、不明瞭化ないしは省略されている。爺ヶ松古墳、野田院古墳がこれにある。

C. 4～5 mの規模で高さはBタイプと同程度である。側壁の持送り構造は顕著でない。未確認であるが、Aタイプから派生し、後述のEタイプにつながるものと思われる。

D. 3 m程度の規模で、側壁の持送り構造が顕著なもの。Bタイプの小形化と考えられる。すべり山2号墳第1石室がこれにある。

E. 3 m以上の規模を持ち、側壁の持送り構造があまり著しくないもの。仮定のCタイプの小形化である。ハカリゴーロ古墳・大塙経塚古墳がこれにある。なお、EタイプとDタイプは時期的にほぼ対応し、CタイプとBタイプも対応することが考えられる。

F. 2 m以下の長さのもので、D、Eタイプの小形化したもののか、箱式石棺との関連が考えられる。中心的な埋葬主体でない場合も多い。石船塚古墳・石清尾山「山巒石塚」・すべり山2号墳第2石室・横峰2号墳などがこれにある。

G. 特殊なものとして、箱式石棺を堅穴式石室で覆ったものがある。石清尾山摺鉢谷で確認されている。

次に土盛り墳の堅穴式石室をみることにする。

寒川町雨滝山奥10号・11号墳・大川町大井遺跡C地区<sup>95</sup>の石室は、詳細は公表されていないが、前述した石室とは全く異なる。奥10号墳1主体（第28図1）でみると、側壁は上開きの傾斜を持ち、墓室の内壁に塊石を貼りつけようにして築き、天井石は架構されなかったようである。そして、この石室は兵庫県加古川市西条52号墳に類似するとし、伴出土器から弥生時代終末～古墳時代初頭に比定されている。<sup>96</sup>

雨滝山古墳群では、奥13号・14号墳でも無蓋と考えられる石室が調査されている。いずれも粘土床を持ち、側壁は上開きにならない。長さ3 m、幅0.5 m程度の大きさで、高さは保存の良いもので0.7 mを計る。無蓋であること、規模が類似することから、奥10号・11号墳からの変化、成立の可能性が考えられる。古墳時代に下るものであろう。

奥3号墳は、京都府椿井大塚山古墳と同範の三角縁三神五獣鏡が出土したことなどから、県内でも最古の前方後円墳の一つとされてきた。ただ有蓋の石室は、長さ3.8 m、幅、高さとも0.6 mで、積石塚古墳の石室規模からみれば特に古くすることはできない。しかし、雨滝山古

墳群には規模の類似した無蓋竪穴式石室があることから、それらを背景としてこの地域の中で成立したことも想定できるのではないかと思われる。この点については、雨滝山古墳群の詳細が公表されたのち、改めて考えてみたい。

高松市円糸寺遺跡のA・C・D地区でも、長さ2.7~2.97mの小規模な竪穴式石室が発見されている。A地区的石室は安山岩板石の側壁基底部をわずかに残すのみであったが、C・D地区の石室（第28図2）は粗雑な塊石積みの側壁が0.6~0.8mほどの高さで検出された。側壁は上方に傾斜して聞く構造はとらないが、裏込めをほとんど用いない貧弱な構造は、天井石が本来架構されなかったことを示唆する。石室規模や構造からみて、奥10号・11号墳などからの系譜を引くものと考えられる。

以上の石室に対して、大川町古枝古墳の石室は長さ4.47m、幅0.87m、高さ1.2mを計り、顕著な特徴をもつなど、規模・構造が全く異なる。これに類似するものとして、河原石で持送り構造の長大な石室を構築した長尾町丸井古墳第1石室があげられる。

なお、丸井古墳の周辺には河原石積みの石室が多く、以下の古墳が調査されている。長尾町稲荷山古墳・大神石社古墳の石室は、長側壁が一方の小口で徐々に狭まり、平面形が長大なくさび形をなす特異な構造である。また長尾町川上古墳は5世紀後半の須恵器や甲冑を出土しているが、石室は奥11号墳に類似したものであった。ただし、これが奥11号墳などの石室と系譜関係を持つかどうかは、あまりにも時期が異なるため、明らかでない。ともあれ、長尾町南部には、この地域で最古と思われる丸井古墳以来河原石積みの石室の伝統があり、しかもそれが特異な構造を持つことは、この地域の特色として注目される。

高松茶臼山古墳第1石室（第5図）は、長さ5.9m、幅・高さとも1mを越える規模を持つが、側壁の持送りやコーナーの隅丸構造は顕著でない。石室の形は長大な箱形に近い。積石塚の石室で、未確認ながらCタイプとしたものである。

龍王山古墳の石室（第28図4）は5.9mの長さを持つが、幅・高さとも0.8mと小さい。側壁は持送りがほとんどなく、高松茶臼山古墳第1石室の幅・高さを小さくしたものとみることできる。詳細は公表されていないが、綾南町津頭東古墳第1主体も同様な構造とみられる。

津頭東古墳第3主体や高松茶臼山古墳第2石室は、龍王山古墳の石室などと同程度の規模をもち、構造も類似するが、側壁の一部ないしすべてを河原石や塊石で構築する。両石室の地域は、河原石積みや塊石積みの伝統を持たないので、後述する5世紀後半代の河原石、塊石積みの石室との関連が考えられる。

土盛り墳の小規模な石室はあまり調査されていないが、観音寺市鹿隈カンヌ塚古墳<sup>かぐま</sup>（第40図）の石室は、側壁の基底に分厚い板石を立て、その上に板石を積むもので、箱式石棺の影響が認められる。

また、長尾町西山田古墳の石室は、箱式石棺を竪穴式石室で覆ったもので、石清尾山横鉢谷

の積石塚でも知られている。

5世紀後半代になると、大川町大井七ツ塚4号墳・長尾町川上古墳・綾南町浦山3号・4号墳・津頭西古墳・綾上町末削古墳などのように、河原石や塊石を用いた石室が広く認められる。長さ2.5m前後のものが多いが、津頭西古墳は4mと伝えられ、そうだとすると、津頭東古墳第3主体や高松茶臼山古墳第2石室との関連が考えられる。

以上の土盛り塚の石室を出土遺物からみると、奥10号・11号墳はこれに伴うとみられる土器から、弥生時代終末～古墳時代初頭とされている。一方、丸井古墳の前方部端から検出された壺は、口部が大きく朝顔形に開き、丸底ぎみの小さな平底を持つものであった。龍王山古墳・高松茶臼山古墳・津頭東古墳からは埴輪の出土を伝える。奥3号墳は、京都府椿井大塚山古墳と同様の三角縁三神五獣鏡を出土し、奥14号の2石室・古枝古墳・丸井古墳第2石室・高松茶臼山古墳第1石室・津頭西古墳から鉢載鏡を出土している。これに対し、円養寺遺跡C地区主体部・津頭東古墳第1主体からは、いわゆる小形の彷彿鏡を出土する。高松市茶臼山古墳第1石室の碧玉製鏡形石は、大阪府大師山古墳・紫金山古墳に類例のある古式のものである。また、丸井古墳第1石室出土の大形柳葉鉄鎌は、大石神社古墳出土品と類似している。

5世紀後半代とした各石室からは、いわゆる第I型式の須恵器を出土している。

上盛り塚の竪穴式石室は、地域や墳丘規模による差が大きいので一概にはいえないが、前方後円墳やこれに準じる古墳の石室をみれば、やはり長大で幅・高さの大きいものから、長くはあるが幅・高さの小さいもの、さらに短小なものへと変化する傾向が認められる。以上をまとめると次のようになる。

- a. 上開きの傾斜する側壁を塊石で構築した石室。上縁で長さ3m、幅1.5m、床面で長さ2m、幅0.5m、高さ0.5m程度の規模を持ち、天井石は持たなかったものと考えられている。奥10号・11号墳や大井遺跡C地区主体部がこれにあたり、出土土器から弥生時代終末～古墳時代初頭とされている。
- b. aタイプの石室から変化したと考えられるものをここに一括する。側壁は上開きにならず、ほとんどが粘土床を持つことから、より完成した竪穴式石室と考えることができる。長さ3m、幅0.5m、高さ0.6m程度の規模を持つ。奥13号・14号墳、円養寺遺跡A・C・D地区主体部がこれにあたり。
- c. 奥3号墳の石室で、天井石を持つが、bタイプの石室と密接な関係を持つと思われる。
- d. 長さ4.5m、幅0.8m、高さ1m程度の大きさを持ち、側壁は持送り構造が顕著である。古枝古墳・丸井古墳第1石室がこれにあたり。積石塚古墳のBタイプに最も近い。ただ、丸井古墳の伴出土器は、鶴尾神社4号墳の土器とあまり違わない時期に比定できると思われる。このタイプの石室は鶴尾神社4号墳の石室にきわめて近い時期に成立していたこ

とが予想されるとともに、元末別の系譜に属し、同時期に併存していた可能性もある。

e. 長さ4.5～6mを有り、平面形は長大なくさび形を呈する特異な構造をもつ。福荷山古墳、大石神社古墳など、長尾町南部に2例確認されており、この地域の特徴例と思われる。河原石を用いることからかつて5世紀前半頃と考えたが、この地域では河原石が古くから用いられているため、さらに古くなる可能性が強い。

f. 側壁の持送り構造はわずかで、石室が長大な箱形をなす。高松市茶臼山古墳第1石室がこれにあたり、時期的には土盛り塙のdタイプと重複するものと思われる。積石塙で未確認のCタイプとしたものに最も近い。

g. 長さ5～6m、幅高さとも0.8m程度の大きさで、側壁の持送り構造はほとんど認められない。fタイプの石室の幅・高さを小さくしたものと考えられる。長さは異なるが、積石塙のEタイプに対応するものと思われる。龍王山古墳・津頭東古墳第1主体がこれにあたる。

h. gタイプと規模・構造が類似するが、側壁に河原石や塊石を用いたもの。高松茶臼山古墳第2石室・津頭東古墳第3主体がこれにあたる。

i. 長さ2m以下の小石室で、鹿限カンヌ塙古墳の石室には箱式石棺の影響が認められる。積石塙古墳のFタイプに対応し、これにも箱式石棺の影響が認められる。

j. 箱式石棺を竪穴式石室で覆ったもので、西山田古墳がこれにあたる。積石塙にも同様なものが認められる。

k. 河原石や塊石を用いた石室で、5世紀後半代の須恵器を出土している。長さ2.5m前後のものが多い。積石塙にはこのタイプ、特に河原石を用いた石室ではなく、須恵器を出土したものも見当らない。

前述したように、鶴尾神社4号墳の石室は県内最古の竪穴式石室と考えられるが、こうした長大な石室が県内の弥生時代社会の中で徐々に形成され、古墳の埋葬主体として採用されたという証拠は得られなかった。現在のところ、古墳の埋葬主体としての長大な竪穴式石室は、県内においても「突如として」成立したとしかいえない状況である。

一方、鶴尾神社4号墳に類似する石室を県外に求めると、京都府元福荷古墳が最も近い。元福荷古墳の石室は長さ5.56m、幅1.02～1.32m、高さ1.9mで、やや長いものの、幅・高さとも鶴尾神社4号墳に類似する。しかも、側壁の下部0.95mほどは垂直ぎみに積上げ、コーナーを直角に組むが、それより上部は持送りが急になり、コーナーには両壁にまたがる石材を用いると観察された石室構造は、鶴尾神社4号墳の石室と異なるところがない。また、鶴尾神社4号墳の石室は大きな天井石を持たず、側壁上部が合掌形に近い形をとると推定されることも類似する。

石室構造におけるこうした類似は、両者の構築技術に共通なものがあったことを示すが、それが一方からの伝達なのか、それとも別なものから両者への伝達なのか、あるいは相互ないし他者をも含めた創造なのかは現在のところ断定するだけの資料がない。両古墳に作出した土器の型式からみれば、鶴尾神社4号墳の方が先行するようにみえるが、在地の土器が新しい時期まで残る可能性もあり、高松平野におけるこの時期の土器の様相がほとんどわかっていない現在では断定することは難しい。ともあれ、石室構造からみても鶴尾神社4号墳は我が最古式の古墳であり、しかもそれが畿内と密接な関係を持つことは注目される。

香川県下の古式の堅穴式石室、例えば積石塚のBタイプ、土盛り墳のd・fタイプは前述したように鶴尾神社4号墳の石室から変化したと考えることも可能である。しかし、規模の類似を問わないならば、高松茶臼山古墳第1石室（fタイプ）は京都府椿井大塚山古墳や、奈良県県茶臼山古墳・メスリ山古墳に類似し、爺ヶ松古墳や古枝古墳の石室（B・dタイプ）は京都府長法寺南原古墳や兵庫県万願寺山古墳の石室に類似しているように思われる所以、必ずしも県内での変化だけでなく、これらとの関連・影響を今後考えなくてはならないであろう。

しかしながら、一方では香川県内の堅穴式石室の主軸はほとんどが東西を向くなど、畿内とは異なる方角を示しており、両地域の石室が同じ背景のもとに築造されたものでもないようである。

県内の石室を概観し、鶴尾神社4号墳の石室の位置を考えたが、残された問題も多く、これについては改めて考えてみたいにしたい。（渡部）

（註）

1. 橋本寅治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』　京都帝国大学文学部考古学研究報告第十二番　1933
2. 原田大六「鉄鍊における湯冷えの現象について—伝匠による手磨れの可否を論ず—」『考古学研究』6-4  
1960
3. 上田哲也・島田清はか『磨擦大中』1965
4. 森浩一『魂ヶ半遺跡予備調査の記録』『魂ヶ半遺跡発掘調査概報』1972
5. 京鳴堂「瓜須遺跡出土の前漢鏡片」『考古学雑誌』67-2　1981
6. 梅原末治『日本考古学論叢』1940
7. 「アサヒグラフ」3120　1982
8. 寺川史郎・尾谷雅彦はか『龟井・城山』1980
9. 横江門也・玉井功・井藤曉子はか『厄摩・瓜生堂』1981
10. 吾崎敬「日本および韓国における貨泉・貨布および五銭銭について」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』  
1982
11. 馬渕久夫・平尾良光「銅同位体比からみた銅錫の原料」『考古学雑誌』68-1　1982
12. 真上及び小林行雄『古鏡』1965
13. 石野博信はか『山陰・立岡遺跡』1971
14. 間壁忠彦「倉敷市酒津と新堀敷出土の土器」『瀬戸内考古学』2　1958
15. 衆安和二三・山本一郎・中司照世はか『次越遺跡』1972
16. 「鳴門市大麻町山の下墳墓群中間報告会資料」徳島県教育委員会　1980

16. 六川恵一「香川県木田郡平佐村原道跡の土器」『弥生式土器集成』資料編 1961
17. 1978年度の香川県教育委員会の調査による。
18. 古瀬清秀氏の原稿による。
19. 1981年度の香川県教育委員会の調査による。なお、詳細は真鍋昌宏氏の御教示による。
20. 下澤公明ほか「百間川今谷道路」『燧川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』Ⅲ 1982
21. 註13に同じ
22. 註20に同じ
23. 註12に同じ
24. 松下謙ほか『播磨・兵庫道跡』1978
25. 石野博信・関川尚功『瀬戸』1976
26. 註20に同じ
27. 1982年度の西尾古墳群発掘調査団による
28. 註1に同じ
29. 註13に同じ
30. 香川室「前半期の古墳文化—播磨と出雲を中心に—」『古代の日本』4 1970
31. 中野雅義・江見正己ほか「燧川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』I 1980
32. 墓内の竪穴式石室の概観については以下の文献があり、今回もそれを基礎とする。  
渡部明大「龍王山古墳調査概報」『香川県埋蔵文化財調査報告』昭和51年度 1977  
渡部明大「末削古墳調査概報」『香川県埋蔵文化財調査報告』昭和51年度 1977
33. 高松市教育委員会『石清水山塊古墳群調査報告』1973
34. 渡部明大『瀬ヶ松古墳調査概報』1975
35. 松本敏二「野田院古墳で想う(1)」『教育香川』12 1975
36. 現地での踏査及び観察による。
37. 川畠道氏の御教示及び現地での踏査・観察による
38. 註1に同じ。野山4号墳の下に位置した。
39. 川畠道氏の御教示及び現地での踏査・観察による
40. 註1に同じ。北大塚西古墳をさす。
41. 註33に同じ
42. 註1に同じ
43. 註1に同じ。石清水山23号墳をさす。
44. 註1に同じ。播磨谷東小横石塚群の一基
45. ブルフ場埋蔵文化財発掘調査団『ブルフ場埋蔵文化財発掘中間概報』1972  
松本敏三ほか『雨滝山道跡群』1973
46. 六川恵一ほか『大川町史』1978
47. ブルフ場埋蔵文化財発掘調査団『ブルフ場埋蔵文化財発掘中間概報』1972
48. 註47に同じ
49. 註47に同じ
50. 橋原末治『梅井大塚山古墳』『京都府文化財調査報告』23 1964
51. 内堀寺道跡発掘調査団『高松市内堀寺道跡調査概報』『香川県文化財協会報特別号』10 1972
52. 註46に同じ
53. 1982年に長尾町教育委員会が調査
54. 和田正夫「大川郡長尾町稻荷山古墳」『香川県文化財調査報告』I 1951
55. 築後正治ほか『長尾町史』1965
56. 註53に同じ
57. 茶臼山古墳発掘調査団『高松市茶臼山古墳調査概報』
58. 渡部明大『施工山古墳調査概報』『香川県埋蔵文化財調査報告』昭和51年度 1977
59. 松本豊胤『古墳その2、茶臼山と津浦東』『郷土資料室別冊目録』第6期 1970
60. 幹瀬常雄『日本の古代道跡』8 香川 1983
61. 註55に同じ

62. 許46に同じ
63. 桜寧豊親ほか『香川県文化財調査報告』10 1969
64. 高橋邦彦ほか『きぬきの進路』1972
65. 渡部明夫『木削古墳測量概報』『香川県埋蔵文化財調査報告』昭和51年度 1977
66. 網干善次ほか『大師山』1977
67. 小野山節編『古代史発掘』6 1975
68. 西谷貞治『向日町元福荷古墳』『京都府文化財調査報告書』23 1965
69. 中村春寿・上田圭範『板井茶臼山古墳』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』19 1964
70. 伊達宗泰・小島俊次ほか『メスリ山古墳』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』35 1977
71. 権原末治『乙訓村長法寺南原古墳の調査』『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』17 1956
72. 梅原末治『振津万柳山古墳』『近畿地方古墳墓の調査』2 1937
73. 德島県博物館天利利夫氏の指摘による。

県内 の 空 穴 式 石 室 集 成

No.	古 墳 名	墳 形	所 在 地	石 室 構 構			方 位	酒 井	副 寄 所	
				玄 口	幅	高 底				
1	鶴 尾 神 社 4 号 墳	前方後円	高松市西垂日町	4.7	1.0~1.2	1.6+	N=93.3°-W	納上床、西枕	栗谷方俗御近御神鏡1、埴丘から土器	
2	備 旗 塚	双方中円	○ 鶴市町・峰山町	3+	1.1~1.18	1.75+			鏡5・石鏡・筒形銅鏡・銅劍・土師器等	
3	石 船 塚	(後円都)	"	峰山町1838-2	1.78	0.44	0.4	ほぼ南北	両小口は安山岩の1枚石。鏡用鏡に筒形鏡1	
4		(前方都)	"		1.85	0.9		ほぼ南北	変形筒形鏡1、埴丘から土器等、埴輪	
5	石 游 尾 山 切 通 し 上	円	"	西春日町野山	約3	約0.54	約0.4	東 西		
6	石 游 尾 山 山 塚	"	"	峰山町	1.78	0.36~0.45	約0.3	東 西	両小口及び側壁の一帯に板石を立てる	
7	石 游 尾 山 捨 無 谷	"	"	峰山町	2.42	1.4	0.42+	東西にちかい	長さ1.73mの箱式石棺を覆う	
8	横 立 山 銀 球	前方後円	"	牛島町423-62	5.05	0.8~1.0	1.1+	東 西	西枕か	
9	すべり山2号塚	(1号石室)	方	坂出市青荷町すべり山	2.76	0.7~0.73	0.8+	北東~南西	持送り構造	
10		(2号石室)	"		約1.7	約1.0		北東~南西	地石積み	
11	越 ケ 桧	前方後円	"	西庄町八十九	5.7	0.9~1.0	約1.3	N=84°~W	西枕、持送り頸蓋、粘土床	
12	ハ カ リ ゴ ロ	"	"	西庄町八十九	3.7	0.7~0.9	約1.0	東 西	持送り構造はほとんどみられない、粘土床	
13	模 嵐 2 号 墳	?		綾歌郡綾歌町富當	0.86	0.46~0.5			彷彿5頭鏡1(伝)	
14	野 田 田 院	前方後円	善通寺市善通寺町長谷2830	5.15	0.7~0.9	1.2			埴丘から土器器	
15	大 塘 経 塚	"	"	吉原町三井之江	3.33	0.8	0.9		持送り構造はほとんどみられない	
16	龍 玉 山	円	大川郡津田町津田中羽羽	5.9	0.75~0.8	0.8	南 北	土器器、鉄劍1		
17	奥 10 号 墳	"	寒川町雨瀬山	上階 2.5 下階 2.2	上階 2.5 下階 1.5	0.8		側壁は上開き、塊石積み、天井石なし	鐵劍、彷彿内行花文鏡・鉄刀・鍔・鐵錠、埴丘から埴輪	
18	奥 11 号 墳	(第1主体)	"	寒川町雨瀬山	上階 3.2 下階 2.2	上階 3.2 下階 1.5		"	堆土上から高坏	
19		(第2主体)	"		上階 2.2 下階 2.0	上階 1.2 下階 0.5		"		
20	大 井 通 跡 C 地 区	円?	大川町富田西	2.1	1.2	0.6	ほぼ東西	"		
21	奥 13 号 墳	前方後円	寒川町雨瀬山	3.2	0.5					
22	奥 14 号 墳	(南土室)	?	寒川町雨瀬山	3	0.5			南文帶神獸鏡1、玉類、鐵器片、棺外より土器器	
23		(北土室)	?						南文帶神獸鏡1	
24	奥 3 号 墳	前方後円	寒川町雨瀬山	3.8	0.6	0.6	ほぼ東西	粘土床	三角縁三神五獣鏡1、鐵斧1、銚1、刀子1、鐵劍1	
25	古 木 枝	"	寒川町富田西古枝	4.47	0.87	1.2	東 西	西枕か、粘土床、持送り頸蓋	方格規矩四神鏡1、管玉3、小玉5	
26	大 人 ピ ツ 塚 4 号 墳	円	寒川町神前石井	2.5	0.7	0.7	東 西	東枕。河原石積み	管玉10、切子玉3・銀鏡・甲冑・刀劍・駒・盾?・須恵器	
27	丸 井 古 墳	(第1石室)	前方後円	長尾町字打越2600	約4.8	0.73	約0.9	東 西	河原石積み、持送り構造	ガラスモ8・管玉3・鐵斧1・鐵錠3・埴丘から土器器
28		(第2石室)	"		約4.15	0.8	0.4+	東 西	河原石積み	環乳狀文帶神獸鏡1
29	稻 荷 山	"	長尾町字長尾寺内打越2500	6.05	0.9	0.87~0.95	東 西	河原石積み、平面形はくさび形、西枕か		
30	大 石 神 社	円	長尾町大字前山1号大石	4.5	0.78		南 北	河原石積み、半圆形はくさび形	鐵劍1、鐵錠2、鐵錠1	
31	西 由 山 田	"	長尾町造田西山田	2.2	0.8	0.8~1	東 西	長さ1.8mの箱式石棺を覆う	鉢?	
32	川 上	"	"	昭和年代乙582-5	上階 3.35 下階 3.05	0.96~1.05	0.74	N=12°~W	河原石積み、側壁は上開き	甲冑・劍・矛・鐵錠・のみ・錘・馬具・須恵器等
33	円 塚 造 途 A 地 区	"	高松市西植田町内義2461-2	2.7	1.3				安山岩板石、粘土床	埴丘周辺から土器器
34	円 塚 造 途 C 地 区	"	西植田町内義2461-2	2.97	0.5	0.6			銅文鏡1・管玉10・小玉3・劍1	
35	円 塚 造 途 D 地 区	"	西植田町内義2461-2	2.7	1.0	0.8	南東~北西	地石積み	鉢?	
36	高 松 茶 白 山	(第1石室)	前方後円	東山崎町・前田町・箭町	5.45	1.1	1.35	N=86.3°~W	粘土床、中央に頭部を向いた2体を合葬	南文帶神獸鏡1・斑彩石2・玉類・刀劍・土器器等
37		(第2石室)	"		5.9	0.8	0.75	N=86.3°~W	地石積み	劍1・鐵錠5・矛1・鐵錠2、埴丘から埴輪
38	津 頃 東	(第1)	円	綾歌郡綾南町大字小野字津頃	5.25	0.7	0.7	東 西	側壁は下部を円弧、上部を板石積み	彷彿内行花文鏡1・劍・刀・鐵錠・斧・錘・鉢
39		(第3)	"		6.6	0.8	0.7	東 西		鐵錠・小玉
40	浦 山 3 号 墳	"	綾南町大字小野	約2.4	約0.6		北西~南東	地石積み	刀2・矛1・鐵錠・須恵器	
41	浦 山 4 号 墳	"	綾南町大字小野	約2	約0.5	約0.4	ほぼ南北	河原石積み	刀1・矛1・刀子2・鐵錠13・小玉・馬具・須恵器等	
42	津 頃 西	"	綾南町大字羽床下	約4				河原石積み	南文帶神獸鏡・銀製墨盒付耳飾・甲冑・刀・須恵器等	
43	木 刃 刑	"	綾南町山田下木削	2.68	0.6~0.7	0.4	北西~南東	小口は板石を立て、長側壁は河原石積み	刀1・劍1・鐵錠10、埴丘から埴輪	
44	鹿 滋 カ ン ス 塚	"	觀音寺市流岡町	1.67	0.4	0.25		側壁基底部は分厚い板石を立てる	鉢1	

(1~15は横石塀、16~44は上盛り塀。単位はm。6世紀以後のものは省略)

## [題] おわりに

鶴尾神社4号墳の調査は、探石工事によって後円部の一部が削られたため、緊急確認調査として実施され、きわめて重視すべき成果を得ることができた。

後円部の竪穴式石室から出土した鏡片は、「伝世鏡」として知られる石清尾山出土の獸帶方格規矩四神鏡の欠損部分であったことは、大きな反響を呼び、この古墳に対する一般の関心を集めることとなった。前述したように、この鏡の文様が今まで言われてきたように「手ずれ」による磨耗だとすれば、磨耗の時期・原因等についてさらに追求してゆかなければならない。

また伴出土器は岡山地方の酒津式、畿内地方の庄内式に平行するものと思われ、土器からみれば、鶴尾神社4号墳は我が国最古式の前方後円墳であることが明らかとなった。しかも、古墳祭祀に使われた土器に畿内の要素が全く認められず、畿内には例のない積石塚という墓制を採用していることは、讃岐という地域が古墳時代の開始時期にきわめて重要な地域であり、同時に地域の主体性をも保持していた状況を物語っているのではないかと思われる。

今回は、こうした問題について十分にふれることはできなかつたが、これについては別の機会に責任の一端を果たさねばならないと考えている。本報告では、鶴尾神社4号墳を含めた香川県内の積石塚の基礎資料をできるだけ提示することに努めた。ささやかではあるが、これが今後の研究、古墳の保護に役立つことを期待して結びとしたい。（渡部・藤井）